朝の目覺め

野原秀錚著

皓々閣書房發行

始

特100
188

野原秀錚 著

朝の目覺めに

皓々閣書房發行

大正
11. 7. 15
内交

序言

世界の文化が科學萬能的に進んで來て、人間は幸福を物質のみに漁る、親に孝行すれば幾ばくの利益がある、君に忠義を盡せば損益如何と云ふ風に考へ、善行篤志も表彰さるゝを目的にすると云ふ工合で全く精神的問題を物質的に食付けて來るのが、多く今日の人情となつて來た、俗風が輕佻浮薄に流るゝも、亦道理ではないか、斯る世に思想問題の混沌も、習俗の惡化も時勢の反影である、之を矯むるは勿論易くはないが、矯める事至難なりとて放任して置かば益す惡化するであらう、余は茲に鑑むる處あり、毎朝の目覺めに自から修め得んとして思ひ付た事を片斷

大正 11.1.3 内交

的に書たもの、其れを集めたのが本書である、長い讀み物は却て讀者の倦怠を招くの恐れあり、短かくして而かも意味深遠餘音嫋々とも云ふべものである、自から修養の研究資料たると同時に、作文の資料ともなる節があるであらう、願くは朝の目覺めの二三分間を割て本書の一項を讀むか、但しは汽車の旅行中徒れづれを慰するかの材料とせらるゝならば幸榮である。

修養は朝に限る、朝の心は純潔なり、朝の氣分は爽快なり、前日の憤懣憎惡、哀憂、失望は一夢の裡に葬り去られ、恬淡一道の光明を認むるの時は必ず朝である、前日の刻苦、奮鬪、痛心、疲勞は、半宵の休睡に依て慰め去られ、更に一倍の勇氣を喚起し來るの時は必ず朝である、朝は

希望の發生期にして活動の發足點である、希望に活くる人は常に新しきを求める、最新の刹那は朝にあり、朝の印象は純潔の心と爽快の氣に迎へらるゝが故に無垢にして深刻なり、朝に讀むものは理解正しく、朝に修むるものは得道裕かなり、朝の目覺めの五分間を漫過すべからず、敢て讀者に慫ひ。

大正十一年五月二十日浩々閣書房に於て

野原秀錚識

目次

一、序言
二、至誠
三、正氣
四、機會
五、反省
六、讀書
七、努力
八、同情
九、勤勞
一〇、分限
一一、後悔
一二、辛苦
一三、艱難
一四、忍耐
一五、愛
一六、惠
一七、死
一八、富
一九、貧
二〇、無比の國体
二一、日本の血精
二二、精神と物質
二三、人心の肥料
二四、德性涵養と人格修養

二四、富と人格と
二五、富と貴と
二六、富者の使命
二七、金錢の力何ものぞ
二八、驕る者は不仁
二九、自彊自制克己
三〇、活動の浪費
三一、自己の運命を建築せよ
三二、運命の三惡德
三三、大義を明かにせよ
三四、曲道は多趣多色
三五、清廉直道
三六、敦厚と溫籍
三七、公は持し難く平は得難し
三八、青年の理想
三九、健康は人生の第一歩
四〇、習慣の力
四一、社會は誠實の爲に成立す
四二、虛榮と眞美
四三、言論の人と實行の人
四四、老ふるも職業を捨てず
四五、艱難條件を甘諾せよ
四六、志士たらざれば勇士たれ
四七、友人の嘲罵と鬪ふは難し
四八、死を恐れず生を怖る
四九、二種の生命
五〇、人生と飲食
五一、人生と勤勞

五二、人生と競爭
五三、人生と知識
五四、人生と良心
五五、人生と忠孝
五六、國家
五七、天下の天下
五八、犧牲
五九、機會
六〇、政道の要
六一、共同心
六二、無私無慾
六三、青年の表象
六四、健康
六五、靈に生きよ
六六、言は行の表
六七、模倣と補短
六八、古人に媚ぶる勿れ
六九、獨創の人たれ
七〇、偉人とは何ぞや
七一、女子の美戒
七二、艱難と鬪へ
七三、貧樂富禮
七四、神童に英雄なし
七五、義と利
七六、寒饑は惡事の始
七七、富貴と同情
七八、青年は負債者
七九、知と暗

八〇、讀書の要（其の一）
八一、讀書の要（其の二）
八二、讀書の要（其の三）
八三、讀書の要（其の四）
八四、鳳は粟を喙まず
八五、讒は猜疑より來る
八六、長行足下に始む
八七、牽牛花の戒
八八、知識の欲求
八九、眞の教育家
九〇、金錢は品行
九一、安　協
九二、運命と勇氣
九三、音樂の德
九四、忿怒の警め
九五、貧賤も羞づる勿れ
九六、老死も厭ふ勿れ
九七、不朽に生きよ
九八、行爲は雄辯
九九、氣品節義
一〇〇、農家の婦女
一〇一、婦人と產業
一〇二、女禍の慘
一〇三、女操の美
一〇四、秘密と女
一〇五、家庭の和樂
一〇六、居は心を移す
一〇七、美の力

一〇八、盜泉も憐を有す
一〇九、足るを知れ
一一〇、鍋の贅
一一一、恩裡害を生ず
一一二、敗後功を成す
一一三、組衣粗食
一一四、悔は善
一一五、悔　悟
一一六、審美は他に分て
一一七、權利と權行
一一八、即日敢行
一一九、爾　端
一二〇、敬と憐
一二一、立身の要
一二二、不思議なる酒
一二三、行の一字
一二四、衣　服
一二五、道を易きに求め
一二六、小兒と醉客
一二七、根苦く實甘し
一二八、唯一の朋
一二九、欲と義と
一三〇、對抗の氣慨
一三一、立身と處世
一三二、感情と理性
一三三、報償と實名
一三四、治は德に在り
一三五、韻文の微妙

一三六、文辭艶麗の力
一三七、詩は眞理の聲
一三八、健性と文藝
一三九、有聲の畫無聲の詩
一四〇、詩と文章
一四一、美人と詩的
一四二、人生は劇壇の俳優
一四三、藝術と趣味
一四四、青年の負債
一四五、春光融々
一四六、夏
一四七、瀑
一四八、川
一四九、海

一五〇、盆栽
一五一、生れながら模倣の天性
一五二、酒の六警
一五三、勞働は神聖也
一五四、勞働と勤勉
一五五、活動と結果
一五六、禮は情を制し義は事を制す
一五七、榮辱を撰ばず
一五八、人は悲哀の子
一五九、三世の識別
一六〇、道德の原則は感情
一六一、死別の慘
一六二、德風の興廢師
一六三、涙は男兒の禁物

一六四、貧富貴賤何ものぞ
一六五、哲學と宗教
一六六、愛と情慾
一六七、生存競爭は生物界の理法
一六八、朋友の信義
一六九、志を立つれば意氣あれ
一七〇、教育難
一七一、剛毅とは何ぞや
一七二、燈下に親む
一七三、誰か秋夜を長しといふ
一七四、田村の美
一七五、堅忍とは何ぞや
一七六、黃禾穰々
一七七、月雲花嵐

一七八、月下笛聲
一七九、主義の人たれ
一八〇、趣味の人たれ
一八一、獨創の人たれ（其一）
一八二、獨創の人たれ（其二）
一八三、行路の難
一八四、色衰へて知多し
一八五、人の爲に學あり
一八六、人の野生は天眞に非ず
一八七、人の爲に錢あり
一八八、菊の教訓
一八九、氣品と修飾
一九〇、貧乏と努力
一九一、吾人生存の意義

一九二、醉霜丹々
一九三、友を擇べよ
一九四、家庭は良學校
一九五、初心を原れ末路を見よ
一九六、滿足と慰安
一九七、競爭は形而上にもあり
一九八、勞働は自然性
一九九、須らく功名心あれ
二〇〇、勇氣は成功の動力
二〇一、舌と手の協商
二〇二、秋既に去る
二〇三、朔風一度至る
二〇四、梅の教訓
二〇五、生活の意義
二〇六、書窓の口吟
二〇七、我等の天賦
二〇八、富貴は品性を求むるより易し
二〇九、民生の助を爲せ
二一〇、知行の不合一
二一一、天道心
二一二、自然は危し
二一三、沈默と廣舌
二一四、人は學問の子
二一五、技術藝能の價
二一六、先づ己を責めよ
二一七、高風と經綸
二一八、活動する職業
二一九、田園

二二〇、早熟を斥け
二二一、青年は老年
二二二、青年の用意
二二三、貨幣と言語
二二四、寡默
二二五、匙の飯
二二六、訪問の要
二二七、談話の要
二二八、自ら護れ
二二九、大事と小事
二二〇、心廣体胖
二三一、慢心
二三二、疑心
二三三、恐怖
二三四、迷咎
二三五、諂諛
二三六、妄譽
二三七、感應
二三八、中康
二三九、秘密
二四〇、婦人

朝の目覺めに

野原秀錚

一、至誠

至誠は眞實心なり、良心の直系なり、精神の純正なり、眞實心の動く處何物の妨げをも許さゞるは至誠なり、良心の直前する處荊棘の碍あるも白刃の威あるも屈せざるは至誠なり、精神の存する處邪道頻に襲ひ、或は利を以てし、或は情を矯め、以て之を韜晦せんと欲するも赫として應せざるは至誠あり、至誠は清澄にして精神の溷濁なき處、潑剌として良心の勇動き、何物も之を侵す能はず道と信する處行ひ義と信ずる處に進

み、毀譽と褒貶とを念頭に措かず、幽幻なる妙意と凄慘なる狀態とに依て出現するものあり、之ありて大義成すべく之ありて業賞すべく、之ありて行ひ實あり、之ありて言威あり、之ありて人信じ、之ありて勇供はり、之ありて仁成り、之ありて禮保つ虛忠僞丹の人は多く至誠の人は稀なり、若し之を見れば則ち天地合して人を助く至誠豈に何事かさゞらんや。

二、正氣

矜高倨傲は客氣おり、客氣を降伏し得て、而して後正氣伸ぶ、正氣は天地の自然に存し客氣は情欲意識より來る、情意の加味を去て天地の自然

に彷徨するの時、始て正氣の磅薄たるに觸るべし、南宋の忠臣文天祥は歌ふて曰く、下りては即ち河瀆と爲り、上りては即ち日星と爲る、人に於ては浩然と云ひ、沛然として蒼溟に塞がると上日星も下江河も、是れ正氣の表現なり、人若し高巒風清きに上り、仰で青空の曠きを望み俯して江河の流を瞰ば、蒼溟の茫々たると自然界の無限なるとに想到し、情意の客氣を去るならん、此瞬間は即ち正氣に打たるなり、藤田東湖が秀で、不二の岳と爲り、巍々として千秋に聳ゆ、注で大嶺の水と爲り、洋々八州を環ると歌ひしも、正氣の表現を說露したるものなり、孟子が浩然の氣といふも、孔子が誠といふも畢竟正氣の異名に外ならず、忠孝仁義天地の道理に配するものは正氣の發動なり。

三、機會

西郷南洲は曰へる事あり、事の上には機會と稱する者二あり、僥倖の機會、設起の機會是なり、世人の唱ふる機會とは多く僥倖の機會を指して言へり、然れども眞正の機會は理を盡して行ひ、勢を審かにして動くにありと、寔に維れ覺醒的道破にあらずや、機會は失ふべからざる一期なり、能く之を捉らへて奮鬪努力已まざるものは成功し、之を見逃がして捉ふる能はざるものは再び得べからず、而して僥倖は萬一を期するものにして、之を待つは進取的氣象あるものゝ欲せざる處、設起は自から起て造るものにして、此勇ありてこそ、巧みに機會の捕捉を爲し得べし唯夫れ天理に背いて機會を造らんと欲するは正道にあらざるを以て、未だ機會を得たりといふべからず、大勢を察せずして動くは無謀なれば機に會せずして早く業に敗れん、機會は人爲の勇と天道の義と合理するにあらずんば、之をして功を成さしむる事能はず、或人曰く機會は前頭に毛髮を有すれども、後頭は禿なりと、味ふべき哉。

四、反省

人は神にあらず誰か過ちなきを期せん、其過ちを知りたるものは則ち之を改むるに憚からざるべし、然れども未だ知らざるの過ちあるを奈何せん、自から良とし行へる事も、或は他を損なふ事なきを保せず又自から竭したりと思惟する事も、或は未だ足らざるものあるも計り難し、自か

ら過ちを知り自から足らざるを知らんと欲せば、宜しく反省の德を積むべし、人は克く他の欠点を見出すべきも自己の欠点を見出す事尠し、自己に欠点なく圓滿充實の人格ならば人皆我に從はん。人の我を非難し我に背くは我に何等かの欠点ありと知らざるべからず、常に反省して思を友に致さば蓋し完璧の人たるに庶幾からん、ロックは云はずや、教育は紳士を創造し讀書は良友を創造し、而して反省力は完璧の人を造ると、然り教育讀書は人格の創造に過ぎず之に依て得たる人格は未成品に過ぎず、之に加ふるに反省の力を以てして始て完璧の人格たるを得べし、曾子曰く吾日に三度び我身を省る、人の爲にて謀て忠ならざるか、朋友と交はりて信ならざるか、習はざるを傳へたるかと。

五、讀書

交友も人に依て害あるべく、靜處も時として人を損ふ、百利ありて一害なきものは夫れ讀書か、讀書も聖賢の經あるべく險惡の緯あるべきを以て、未だ必しも悉く害なしと云ふべからず、唯夫れ之を研究的に讀了するに依て齟齬其滋味を呑下し糟殘を排出すれば則ち益ありて害なきなり。孟子は云へり、悉く書を信せば書なきに如かずと、書は研究の料とし砥磨の資とせば過ちなかるべし、ベーコンの云ふを聞け、讀書は該博の人を作り、對話は敏捷の人を作り筆記は精確の人を作ると知見を博むるは讀書にあるべく、其知識をして精確ならしむるには更らに書中の要

を筆記すべし、又ポックトンは云へり一書を讀み了らざれば他書を讀み起すべからず、一書を讀み了ると雖も書中の意義悉く了解せざるうちは決して他書を思ふ可からず、且つ何事を學ぶにも全幅の心力を用ふべしと、劔掃曰く胸中三萬卷の書なければ眼中天下奇山なしと。

六、努力

努力は境遇の如何と場合の如何とを問はず、人生を有意味に過さんと欲する者の、暫時も忽せにすべからざる一の德行なり、品性如何に一世の範たるも性行如何に清廉なるも、努力の伴ふなくんば、只己れを潔くするに止りて、社會に何等の裨益をも殘さゝるべし、目的は如何に善良なるも路徑は如何に正直なるも努力の伴ふなくんば成功を見るべからず努力は成功を生むの母なり裨益を起すの動力なり、凡そ生物は自己保存の爲に生存競爭の法則を免かれざれば人類は猶更ら激しき競爭の裡に自己を保存する事に汲々たり、自己保存は自己の形骸のみを存置するにあらずして、精神上又は事業上に於て自己を認めらるべく保存せんと欲するものなり、自己保存の目的は如何なる利器に依て之を達し得べきか、曰く努力是れなり、財寶も知識も努力の之に隨伴する無きに於ては野路に放置されたる瓦礫に均しきのみ。

七、同情

俗に云ふ人は相持ちなり、凡そ宇宙間に生として生ける生物は動物と植物とを問はず自己保存と同族保存の法則を洩れず、海中の水族も同族の蕃殖に努力し、地上の昆虫も同族の保護に怠りなきを見ずや、竹籔の筍が其の領地を擴張して同族蕃殖を圖り、芹草が同族の保護に努むるを見ずや、況して萬物の靈長たる人類にして同族の保護と長久とを願はざらんや、其同族を保存し之を庇護するの心理作用之を同情と云ふ、人生は個々人々に於て互に生存競爭の爲に努力しつゝあるの一面に於て相互救濟的に活動するものなり、即ち貧者を見て憐れみ孤獨を見て恤み、不具を以て惠み、弱者を見て憫む惻隱の心は即ち是れ相互救濟的の活動にして同族保護の心理作用にあらずして何ぞや、左れば同情は自己に對する努力と相並で同族に對する一の德行心なりと知らざるべからす。

八、勤勞

勤勞と勞働とを混同すべからず、勤勞は人類の勤務的活動の總稱にして勞働は勤務的活動の一種なり、故に勞働も勿論勤勞の一たるべし、勞働は經濟的動作にして、報酬の必ず之に伴ふものなれども、勤勞は人道的動作にして必しも報酬の伴ふを要件とすべきものにあらず、勞働は經濟學の部類に屬し、勤勞は道德學の範圍に屬せしめざるべからず、勞働は人類の之を拒むを得べき事もあるべしと雖も勤勞は絶對に服從せざるべからざる人類の義務なり、義務とは相對の語なるが故に、勤勞を義務と

せば是れ天地に對するの義務なり、宗教的に云へば神佛に對するの義務なり、衣食の爲に力役するは勞働なり、衣食足るも猶且つ勤めて勞せざるべからざるは勤勞なり、王侯の政治を見るも美術家の丹精を凝らすも政治家の論難奔走も、學者の研究も、工夫の槌を揮ふも、農夫の鋤を採るも、皆是れ均しく勤勞なり、勤勞は自己を練り、社會を進め、三才に報ふる所以なり、故に吾人は勤勞の眞意義を克己心の養成、天地化育の賛助、報恩の道念、此三個に歸着するものと解せんと欲す。

九、分限

分限は自然の法則なり、分限を超ゆれば天地保たず人事亂る、太陽を擁して其軌道を逸せざるは地球の分限なり、地球を繞りて、一定の軌線を行くは月球の分限なり、若し其則を超へて月球太陽に直系たらんとし、地球が月球の擁星たらば忽ち一大天變と爲りて宇宙の秩序は亂れん、人事亦然り、子が親を役して之を叱咤し、妻が夫を頤使し、臣が君を勞するが如き事あらば倫道全く晦暝と爲り、社會の秩序は亂れん、分限は天賦の稟業にして、必しも之を以て貴賤を分つべからず、社會は大なる劇壇にして人生は登場の俳優なり、各其の特長の技能に依て其役割を務め或は君主と爲るもあれは或は臣下と爲るもあり、或は父となるもあれば或は子と爲るもあり、若し其の分を守らすんば劇壇は殺風景のものと爲るべし、爛漫の櫻が人を喜ばすも、籬根の小菊が人を樂ますも、太陽が

世界を照すも、提燈が人を導くも皆其分に應じたる働きならずや、鶴の腿長しとて之を斬るべからず、鴨の脚短かしとて之を繼ぐべからず、人は各其分限を守り、其の職務と其の生活と其境遇とに興味を有せば頗る妙味あるを覺ふべし。

一〇、後悔

「後悔を先に立たして後から見れば杖をついたり轉んだり」と、何ぞ揶揄の至れるや、後悔は先に立たず、必ず後れたる心理的發動に據る轉ばぬ前の杖は事前の戒心に出づ、後悔無からんことを欲するの用意なるべし、人は神明にあらず、事前の豫知は之を期すべからず、故に往々にして後悔あるを免かれずと雖も、前車の覆れる轍跡は、歴々として多くの訓戒を吾等に示すにあらずや、轍跡に深き注意を拂ふと、只茫然として行くとは、後悔の多少の岐るゝ處なり、後悔は固より人生の一美德なり、懺悔は人生の一勇氣なり、改善の德性なきものは悛悔する能はず、自己を怯るゝ者は懺悔を爲し得ざるなり、良心の悛悔懺悔は凡ての罪を滅す、吾等は悛悔と懺悔と尊敬するものなれども寧ろ後悔なきに如かざるを思ふ。

一一、辛苦

膏濃の食に配するに辛味を以てするは、飽ける舌感と胃腑の惰慢とに刺

戟を與ふるものにして、之ありて味ひ好く食ふを得べく、以て滋養を取るを得べし、甘糖の飲に配するに苦味を以てするは、味感に變化を與へて、更らに食欲を進ましむるに適す、食に辛なく食に苦なくんば其美味を知るべからず、人生の行路之に相似たらずや、路程平坦にして何等の支障なくんば、世路の眞味は之を知るべからず、屹崛あり、濠渠ありて工夫するにあらずんば、通行すべからざるものに出會し得て、始て人生の眞味を覺へん、辛苦を以て立身出世の必行路程と爲し之を嘗むる事多きに依て始て成功の人たるべきは、膏甘に配するに辛苦を以てし始て滋味を取る事を得ると一般なり、辛苦を嘗め盡して膏甘の味を取る、其時の美味如何ぞや、辛苦は彼岸に達する路程の刺戟なり、之ありて奮鬪の勇も起るべく、之ありて不撓の氣も發すべし。

一二、艱難

艱難は人を玉にするか人を死に致するか、我未だ之を自定する能はずと雖も、自から活ける人が自から死せる人かを試むるもの試石は艱難なり艱難は人生の奮鬪すべき對手なり、艱難と戰ふて勝つものは人生の優勝者たるべく、之に負くる者は劣敗者たるべし、或人其子孫に誡めて護身の靈符を與へんと云ふ、而して曰く、今爾に與へんと欲する處のものは神社佛刹より受くる護符とは全く性質を異にす、目に見る能はず手に取る能はず、形と影と共にある事無し、何ぞや只辛苦艱難の四字を與へん

と、辛苦艱難果して護符たるべきか之れ人を困しむるの符にして未だ以て幸ひと見るべからず、然れども艱苦に堪へ辛難に抗するの度量は此靈符に依て之を得べし、故に心に艱難の護符を有するものは、自彊息まざるの辛抱と堅忍不拔の勇膽とを得て、立身も揚名も、富貴も、壽考も、皆之れ擇ぶがまゝならん。

一三、忍耐

難を忍び久しきに耐ふるは、德行の一なり、忍ばず耐へざるは即ち自暴自棄なり、前途に希望を有する者は忍び、將來に自信あるものは耐ゆ、短慮にして忍ぶ能はざる、其刹那既に自暴せるなり、性急にして耐ふる能はざるは、其刹那既に自棄せるなり、忍難耐久は成功の母にして忍耐の母なくして何ぞ成功の子を生せんや、孟子は曰へり、井を堀ること九靭にして、泉に達せざるも、猶井を棄つべからずと、蓋し幾靭の深と雖も泉に及ばずんば止まざるの決心を以て、前途に必ず泉を堀當つべしといふの希望と必ず地下に泉ありとの自信を棄てずんば必ず之に達するを得べし、恥を忍ぶも亦然り、韓信が斗屠の輩の股問を出るも、彼は前途に希望を有し、將來に必ず此の希望を達すべき自信を有したればなり、恥に怒るの時は即ち自暴の時なり、淺野長矩の吉良義英に於けるを見ずや

愛は情の發露にして親の子間に起るものを以て根源と爲す、子を愛するを慈と云ひ、親を愛するを孝と稱へ之を社會道德の基礎と爲す、此情を展開しては種々なる形式と爲つて、其情の美は人類の間に動くものなり君を愛するの忠は孝より來り、臣を愛するの仁は慈より來り、其相凝りたるもの即ち國を愛するの義と爲り世を愛するの憂と爲り、更らに平和に處しては神佛を愛するの信仰と爲り、智識を愛するの哲學と爲り、長幼男女相愛するの倫理と爲り、骨董や草木を愛するの嗜好と爲る、然れども是等純正の愛に他の要素を交ふれば、即ち子を敎育するも老後の安樂を得んが爲と爲り、親に仕ふるも家督相續を得んが爲と爲り、君に竭すも國に盡すも功名を得んが爲と爲なり、男女の相愛も性欲を目的とする爲と爲り、骨董草木を愛するも賣買して利益を得んが爲と爲る之を變体の愛とや云はん。

一五、惠

惠は主觀的に於て仁なり義なり慈なり善なり客觀的に於て恩なり浴なり負なり荷なり、人生美德の一として尊ばる、人類社會の狀態は恒に惠の交換なくんば遂に其風の美を期すべからず、惠には必ず報謝の伴ふあり然れども惠者自から報謝を求むれば是れ惠にあらざるなり、施して名を賣らんとし、惠みて恩を賣らんとするが如き之を僞善といふ、唯惠せらるゝ者心に其報謝を忘るゝなくんば即ち是れ報謝なり、我等は貴賤貧富

別なく天地間の惠を受く、太陽の熱を受けて生物の發育あり、地球の回轉運行を受けて四季晝夜を生じ、草木禽獸魚介の類ありて生活の資を爲し、山川風月花香の美ありて耳目を樂ましめ、境遇の變化行路の難易ありて修養に資す、見來れば森羅萬象皆我爲に惠ならざるなし、四恩九恩を數ふるも猶足らず宇宙は我等に恩を施して而かも報謝を求めず、然れども我等の活動は宇宙の惠みに對する報謝と悟らんかな。

一六、死

死とは何ぞや肉と靈と相別るゝに在り、血液の循環沮みて筋肉の彈力を失ふに在り、死は生物の免れざる運命なり、死に自殺あり、病歿あり、傷害あり、過斃あり、戰死あり、然れども肉と靈と相別れ筋肉の彈力を失ふ點に於ては即ち一なり只其の死容に依て死に生くるものと死に死するものとの別あるを見る、常人の死は死に死せり、偉人の死は死に生けり常人は死せんが爲に死し偉人は生きんが爲に死す常人の死は死の價値を認めざれども、偉人の死は絶大なる教訓を遺す、故に死して即ち生るものなり、釋迦の死は慈悲に生けり、基督の死は愛に生けり、ルーテルの死は自由に生けり、孔子の死は仁に生れり、楠公の戰死は擧門の忠義に生き高山正之の憤死は慨世の震動に生き、吉田松陰の横死は至誠に生き乃木大將の自死は幾多の美志を籠めたる壯烈に生けり、金科玉條の倫道の哲理を遺して死するも、不言の間一死の無慮の空文的教訓を遺して死

するも俱に偉人の死は死に價値あり、死に生ける光明を見る。

一七、富

富とは何ぞや、財物資實の裕かなる是れなり、國家も人も之を得ん爲に競爭し、之を求めん爲に奮鬪す、然れ共富は人生最後の目的にあらずして、目的を達すべき手段に必要の物件なり、英國が世界の重鎭たるも富の力なり、米國が威勢を張るも富の力なり、カーネーギーが人類問題に貢献するも富の力なり、三菱、三井が國家に竭すも富の力なり、而して人格低く品性卑くして社會の地位上を爲し、權威を爲すものも亦富の力なりとせば、富は社會の何物よりも強大の力を有するものゝ如し、併しながら富は物質なり、之を奪ふべし、品性は精神なり之を奪ふべからず富には浪費の害伴へども品性には何等の弊なし、富の尊ぶべきかは、只其運用の高尚なるに在り、明治天帝の御製に「もつ人の心によりて寶ともあだともなるは黄金なりけり」とあり尊ぶべき富の運用を敎へて遺憾なきものにあらずや、精神の富と化合するにあらずんば此御敎へに遵ふ事難し、清き精神に活きて強き富の力を運用するにあらずんば、富者の眞正なる權威を認むべからず。

一八、貧

貧しきは人の最も諱む處にして、之を見る事蛆虫よりも賤し、貧果して

賤むべきか、賤むべからざるか、そは品性の伴ふと否とに據て決する問題のみ、然れども退て貧を守るは社會國家に益なくして害あり、故に之を脱せんとして努力と奮鬪とを續け猶且つ得ずんば、則ち人事を盡して天命を待ち、敢て貪婪に陷らず之を清貧とや云はん、貧に困みて猶且つ懶惰に處り、不正の財を貪るもの之を濁貧とや云はん、勤めずして貧を樂むは失意者の怨言のみ、若し國民にして悉く貧を樂めば國家は富强なる能はず、人類にして皆貧に安んぜば社會は發達する能はず、有爲の才を抱て空しく埋沒し、資力なき爲に世に顯はれざるもの在り、左れば貧は立身出世の妨げなるか、諺に貧は諸道の妨なりと云へり、味ふべきの言ならずや、我等は汚れたる財を貪らずと雖も求めて貧に就くべからず、

苟くも人生の幸福を辿り社會の向上發展に貢献すべき人間の義務を解せば、貧を轉じて富と爲すの努力を怠るべからず、唯夫れ精神濁れて富を貪るは清貧に安んずるに如かざるのみ、貧豈に尊ぶべきものならん。

一九、無比の國体

弱肉强食は諸國の蠻風なり、世界何れの國に於ても歴史は此事の免かれざるを證明せり、强者自から起ちて我は君主たるべしと云ふ、人亦た之を異まず、獨り我帝國に在ては之を許さゝるなり、神武建國以來君臣の關係は恰かも父子の如く、侵すべからず、劉すべからざる定分あり、如何なる强き子も父を殺して家長たる能はざると同じく、如何なる强き

臣ゝ君を弑して國君たる事能はず、父を害するの子は不孝の極として家族之を容さゞると等しく、君を害するの臣は不忠の極として國民之を許さず、家系の名譽は其系統の永續に在ると同じく一國の名譽を重んずる爲に蓮綿たる皇統を擁護す、世界廣しと雖も斯の如きの國果して何處にか在る。

二〇、日本の血精

日本の血精は醇潔なり、此血精より成る日本道德の尊ぶ處は廣き意味の社會道德よりも狹き意味の國家道德に在り、此道念の美しき事千百の物質美に勝り、此道念の强き事億萬の兵に勝る、故に諸國は物質を以て國を支へ我は精神を以て國を支ふ、是れ敎へんと欲して敎ふべからず、傳へんと欲して傳ふべからず、祖宗の遺訓は千秋光彩を放ち、化して上下國民の血と爲る、是れ卽ち日本人の血精なり、此血にして日本民族の体軀を繞る間は、日本は外敵の爲に辱しめを受くる事あらざるべし、然るに往々にして自から日本人たるを忘れ、醇潔なる血精を汚濁せんとする者あるは誠に慨歎に堪へざるなり。

二一、精神と物質

横井小楠云へる事あり、曰く堯舜孔子の道を明にして而して西洋器械の術を盡さば、何ぞ唯國を富すのみならんや、何ぞ唯兵を强くするのみな

らんや、亦以て大義を天下に布かん耳と、此言實に今日我國の狀勢に對する一大警告と爲すべし、混沌たる我思想界をして、鮮明なる光明を認めて進ましむるにあらずんば、或は危險に陷らんことを恐る、支那古聖への垂敎する道義は、我國固有の道德と一致し、忠孝一体の義を國粹とする我精神的德敎は、支那の舞文的德敎に依て益す鼓吹せられ、其功果は克く壯嚴に發揮せるを見るべし、泰西の文明は物質に在り、其長を取て我短を補ふは可なり、精神を擧げて彼の擒と爲るは即ち不可、彼の美は物質に在り我の美は精神に在り。

三二、人心の肥料

食物の人身を培養する如く知識は人心を培養するの肥料なり、食物を求むるを知て知識を求むるを知らざるは遺骸に培はんと欲するに同じ、苟くも白痴にあらずして常識を具備する者は、精神的培養の必要なるを認めん、スタインは曰く、知識の希望は富の渴望の如し、之を得るに隨て愈よ增加すと、知識は間斷なき希望を有す、其發達進步に依て益すその欲望を增すは、學者の焦慮苦心を以ても知るを得べし、孔子曰く、明鏡は形を存する所以、往古は今を知る所以なりと、德を聖賢に求め知識を往古に求むるは、敎の當然なり、知慧と稱するものは人自から之を有せん、然れども知識の培養なき知慧は瞞着に過ぎずして眞摯なる見地を有せず、人誰か學ばずして知るものあらんや、名僧知識も亦學問の凝塊た

るを知るべし。

二三、 德性涵養と人格修養

德性の涵養は自から正しふする所以にして、人格の修養は外に尊敬を求むるものなり、德性備はらずんば、心事常に兢々、或は猜と爲り、或は疑と爲り、或は怒と爲り、或は怨と爲り、或は憂と爲り、暗黑の裡に生息するの感あるべく、人格修らずんば、廉耻を破り、膝行を敢てして憚からざるが故に他の卑視を招き輕侮を招き、毫も敬意を拂はるゝ事なかるべし、人は禮節の間に生息して始て人たるの快味を覺ふべし、禮節は双互の尊敬を意味す、尊敬の行はれざる人交は、禮讓を逸するが故に極めて野卑なり、而して人格の修養は之を德性の涵養に待たざるべからず品性修らずして人格の擧りたるもの未だ之れあらず、我所謂人格は嚴肅なる意味に於ての人格にして決して人爵的の價格を云ふものにあらざるなり。

二四、 富と人格と

富と人格とは伴ふものなりや否、富は以て人格を造るに足らず、人格亦以て富を造るべきものにあらず、否寧ろ富と人格とは相背馳せるを見る試みに地位を論ぜば、富者其のものは決して尊敬すべきものにあらず、富者が社會公益の爲めに其資財を拋つが故に始めて社會は之に敬意を拂

ふものなり、富者にして只自己の獸欲を縱まゝにするに止まらば、彼れは唯財を握るの禽獸に等しきのみ何ぞ社會の尊敬を買ふに値ひせんや、若夫れ人格に至ては然らず、人格其のものが既に社會の儀標と爲るものにして、其の言行思想は直ちに社會に偉大の功果を與ふるものなれば、其の世道人心を稗益する事の力は巨萬の富に勝ること數等、故に人格高きものは求めずして社會の尊敬を得べく、富者は財を拋て尊敬を買ふにあらずんは得べからず、以て知るべし兩者高卑の隔絶如何を、左れど卑陋なる世は人格を敬せずして、富に媚ぶ、思ふに是れ良心の僞りか。

二五、富と貴と

富と貴とは並び稱せられて社會の二大勢力なり、富の前には權勢なく貴の前には天爵なし、富は人を制し貴は人を壓す、此二者の相待つ恰かも輔車の如し、富は以て貴を買ふべく貴は以て富を作るべし而して富貴併せ有するに至ては天下の豪と唱へ、爲さんと欲する處殆んど成らざるなし、然れども猶克く富貴の力屈する能はざるものあり、何ぞや、正義眞理是れなり、世を蓋ふの富力も一塊の眞理を賠ふに足らず、萬象を壓するの貴權も一片の正義を曲ぐるに足らず、故に富貴の力强く懦夫を屈せしむべきも、信仰の人を屈せしむる能はず、正道の人を邪けしむる能はず只夫れ迷へるものを誘惑し、欲望の弱点に乘じて以て其の猛威を逞ふするに過ぎず、之を稱して富貴の力といふ、富貴の前に權勢天爵なし

と誇るも、正道眞理の前にも亦富貴なし。

二六、富者の使命

富者の使命は何ぞや、云ふまでもなく人類の幸福を適當に案配すべき事是れなり、社會が富者の驕傲を許し自尊を默認する所以のものは、彼れが其の力を割て社會に施す處あるが爲めのみ彼等が社會より尊敬せらるゝは決して、人格の高きが爲めにあらずして、幸福の案配者として其の假有する財寶を社會の公益若くは薄幸者の救濟に投ずるが爲めのみ、若し彼等にして獨り自から奢侈を極めて人の饑ふるをも顧みず、獨り自から贅を盡して人の難をも救はざらんか、維れ恰かも禽獸が自から飽食を

求めて他を顧みざると何ぞ擇ばん、彼れ自から美味に飽き奢侈に誇りて我は富りといふと雖も、富なるものゝ功果が社會に及ばざるに於ては誰か彼を敬するものあらんや、富めば即ち社會の尊敬を享くべしと思ふは大なる心得違ひなり、唯其の富者たる使命を全うするに依て初めて社會の尊敬を享くべきのみ。

二七、金錢の力何ものぞ

金錢は天下の至寶なりや、誰か此問題に對して我等の首肯すべき解答を與ふるものぞ、富は之に由て得べく兵は之ありて强かるべく産業も之に由て興すべく、教育も之に由て布くべし、學者も之に由て買ふべく技術

も之に由て求むべく、美人も之に由て養ふべく、滋養も之に由つて味ふべく、別莊も之に由て建つべく、美衣も之に由て纒ふべく外妾も之に依て蓄ふべく、人間一切の欲望は斯の如く金錢に依て充たさるべし、果して然らば之を以て天下の至寶なりといふを得べき乎、嚴格なる意味に於て之を覇察せば決して至寶とするに足らざるなり、見よ士の僞りある意志は、金錢に依て買ふを得べきも、以て心腹を求むる能はず、美人の肉体は金錢に依て自由にするを得べきも、以て其の心を奪ふ能はず、形而下の快樂と滿足とは金錢に依て之を需むるを得べしと雖も、形而上の快樂と滿足とは到底之を以て需むべからず。

二八、驕る者は不仁

驕る者と吝なる者は多く不仁にして、謙なる者と節なる者とは多く仁なり、仁者は仁を行ふを樂みとすると同じく、不仁者は不仁を行ふを樂みとす、然れども人心は元と善良なり、不仁者と雖も、其行ふ處自から不仁なるを知らば何ぞ之を行はんや、驕吝の餘り知らず識らず不仁に陷りて之を樂しむは只其性情の缺陷耳、淫聲美色に耽り、瑤宮玉台に居り酒池肉林珍禽奇獸を屠りて至樂と爲すは傑紂の徒の樂なり、黎民衆庶と苦樂を俱にし、其賑はふを見て喜びと爲すは堯舜の輩の樂なり、仁と不仁とは由來賢愚に伴ふものにあらず、至愚と雖も不仁の跡を見ては不快の感あるべく、賢者と雖も不仁の不仁たるを自覺せざるの間は之を行ふて樂しとす、唯是れが爲に人心を失ひ、國を亡ひ家を喪ふに至て始て悟

る、豈に察すべき事ならずや。

二九、自彊自制克己

債を負ふは發展せる信用の活動なりといふ、去れど債を負はざるには如かざるなり、負債は固より信用の發露なりと雖も、之を起すは一の弱點たる事は爭ふべからざる事實なり、ゼロール曰く、負債は甚だ恐るべき子孫を產む者なり、虛言卑劣恥辱心配欺瞞等の惡德を生ずと、何ぞ夫れ至言なる、されば人は負債を峻拒し得るの勇氣あるか、負債に伴ふ敗德を避け得るの德性あるにあらずんば、得て淸廉を期すべからず、債鬼は人間に魅いり易きものなり而して遂に人の獨立を阻害するに至る人若し債鬼を近けず、獨立を維持するの方法如何を問へば、我は唯一策ありと答へんのみ、曰く分際相應の生活是れなり、此行事甚だ易きに似て易からず、之を遂行し得るものは自彊自制克己の心力に富みたるものにして、何れの事業に隨ふも成功の人たるを失はざるべし。

三〇、活動の浪費

浪費は凡ての事に於て不經濟なり、豈に只金錢の浪費のみならんや、時間の浪費のみならんや、活動の浪費も亦人生上大なる不經濟なり、人一たび志を定めて之れを遂げんと欲せば、一に其方向に向て進み、決して眼を他に轉ずべからず、若し中道にて方向を變ぜば、其の以前に費したる

時間、勞力、心力、共に浪費と爲り了るものにして人生の不經濟なり、故に人は其の志を定むるに當つて、其事業が自身の性格及び体力に適するや否やを精考し、而して後着念すべし、一度び着念せば全力を之に傾注し、殆ど其の結果の如何を眼中に置くべからず、然る時は假令ひ事業は成功せざるも、其勇氣と志の光輝は社會に認められん、事業未だ成らざるも、志の範たり、氣の模たるを得ば、是れ人生の成功にして、其間の活動は浪費にあらず、經濟的に費されたるものと謂ふを得べし、其の業成らざるも志の範を示せば則ち人生の成功なり。

三一、自己の運命を建築せよ

人は各々自身の運命の建築者なり、幸運と薄命とは決して先天的賦與のものにあらず、怠慢放逸の者には業を奪ひ、勤勉力行の者に産を授くるは社會が公認せる法則なり、天裁が下す判決なり、幸運と薄命と岐るゝ便ち茲に在り何ぞ天を憾み人を怨まんや、人は各々職業なかるべからず而して職業に就ては皆相當の趣味を覺へて之に從へば其の業の貴賤を問はず、良心は之に滿足し愉快を感ずるに至るべし、既に良心の滿足を得ば、献身的に力行勤勉せよ、精勵と堅忍とは慥かに運命を建築するの斧槌なり、此斧槌を自から抛棄して拱手天を仰いで如何に幸運の降來を願ふも、天は自然の法則に反するものに向て、幸ひある運命を與ふべくもあらじ、只自から運命の建築を爲すべしと命ずるに過ぎざるべし、嗚呼

勤勉力行なるかな、而して之を勵むは其の職業の趣味を覺へて良心の滿足を求むるに在るなり。

三二、運命の三惡德

人は自から省みて自己が世に生存して、少なくも社會の一部に必要なる人物たる事を自覺するに至るの時、大に其新運命を建築すべき氣運を見出すものなり、此自覺あるものは既に躬行の人なればなり、不忠實、不熱心、懶怠は運命上の三惡德にして、之を排除するにあらずんば、躬行の人たるを得ざるべし、人は其從ふ處の業務を姑らく天與の職務として樂しむを要す、之を天職と思惟せば貴賤高卑を論ぜず、忠實に熱心に勤勉に業に從ふを得べし、然らざるものは之れ實際に於て自愛心の欠乏と云はざるべからず、何となれば自己の運命を建設せんとするは自愛心の發動にして、不忠實、不熱心、懶惰は、到底運命の向上を求むべきものにあらざればなり、希望の彼岸に達せんと欲せば非常の堅忍なかるべからず、或る場合には犧牲たるを辭せざるの決心なかるべからず、是れありて始めて新運命を捉ふべく社會の一部に必要なる人物たる事を自覺するの域に達すべし。

三三、大義を明かにせよ

人大義を明かにすれば、其出處進退を過つことなかるべし、人生の大行

は忠孝仁義に在り、忠と孝とは二にして其本一なり、仁と義とは二にして其本一なり、只其の間自づから輕重あるのみ、君臣の道義を忠と云ひ、親子の道義を孝と云ふ、國民的道德を義と云ひ、社會的道德を仁といふ而して親子の關係よりも君臣の關係を重しと爲す、則ち是れ大義なり、然れども大義を果して、小義を蔑視するは、猶義を知らざるに同じ、大義小義の並び立つに當て先づ大義を果す爲めには姑く小義を犧牲にせざるべからず、唯其の小義を犧牲にしたるの罪、之を大義を以て、賠ふに至て、始めて全き義人たるを得べきなり、此場合に於て往々死に美名を托するの已むなき事あり、所謂義は大山より重く死は鴻毛より輕しといふ即ち是れなり。

三四、曲道は多趣多色

直通の道路は興味乏しくして行く人をして倦ましむ、曲折の徑路は興味ありて行く人をして樂しましむ、道義を行ふも亦然り、正道は乾燥無味にして曲道は多趣多色なり、故に多趣を好み多色に迷ふの弱點を有する人類は、大概ね曲道に入り易し、若し多趣多色を見て之を避くるの勇あるものは、最も己れに克つの力強き人なり、佛者は曰く、「道を學ぶ人、情欲の爲めに惑はされず、衆邪の爲に亂されず精進無爲なれば吾此人を以て必ず道を得ることを保せん」と、然り情欲の爲めに惑はされざるは克己心の強きが爲めなり、衆邪の爲めに亂されざるは意志の強きが爲め

なり、人の行ひを正すは自から其弱點を知て之を警むるに在るなり、自己の弱點を知るものは必ず間然する處なき人と爲るに近し、酒色に入り易く道を曲げ易き人の弱點を矯むるに至て初て君子たるべし。

三五、清廉直道

清廉直道にして而かも氣宇宏魁なるは丈夫の態なり、苟くも此態を失はずんば、縱ひ志を天下に得ずと雖も、又英雄豪傑の名を博する能はずと雖も、大丈夫たるを失はざるあり、古賢の言を味へよ「天下の廣居に居天下の正位に立ち、天下の大道を行き、志を得れば民と共に之に由り、志を得ざれば獨り公道を行ふ、富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず威武も屈する能はず、此をこれ大丈夫とは謂ふなり」と世を廣く渡り、正直の立場を占め、天下の大道を行かば人の毀譽何かある志を得ると否とは只夫れ運のみ、獨り樂むと衆と樂むとの差ある耳、富貴に淫せられず、威武に怯せられざるは、即ち高士稜々の氣骨存する處、以て世に範とするに足らん、志を得ると否とは、第二の處世にして、第一は是れ清廉直道に在り、而して其の氣宇宏魁を尊ぶのみ。

三六、敦厚と温籍

敦厚と温籍とは感化の一大實力なり、輕薄と冷刻とは人を遠くるの大不德なり、厚醇にして温和なる慈母の下に不良少年を出したるの例なく、

浮薄にして冷峻なる友の間に信義の人を出したるの例なし、誠心的に敦厚温籍の情ありて、諄言寛諭を以て人に臨まば、遂に兇漢黠奴も克く慚感反正するに至らん、天地の眞理は人以上の力を以てせば、人に勝たざるなきを示す、若し兇悪好黠の徒、到底濟度し難しといふものあらば、是れ敦厚温籍の誠心未だ彼れに徹せざるなり、心の力未だ人を動かすに足らざるなり、峻嚴悽愴の風物も、一朝温和なる春風駘蕩の暖に遭へば忽ち笑を含んで靄然たり、如何なる慓奸猛徒も温容寛和の前には膝を屈せざるを得ざるべし回善感化の術只夫れ敦厚と温籍とに在り、余は之を人生の一大威力と信ず。

三七、公は持し難く平は得難し

公は持し難く平は得難し、無念無想天眞の境に至るの時、僅かに之れを得んのみ、人は固より人義禮智信の諸德を以て相制す、之を相制するだけ天眞の至公至平なるもの無きを知るべし、然れども心を正平にして事を見、己れを去て物に對せば即ち天眞に近きを得べし、心正しければ事理を辨ずるに明かなる事、猶明鏡の克く物を照すが如し、心平かなれば曲直を分つ事易きは、猶水靜かにして能く影を映すが如し、平々坦々の公道を行けば、毫も蹉躓の恐れなく、極めて氣安らかなるに反し、屹崛たる徑途崎嶇たる坂路を往かば、心恒に安からず、戰々兢々たるを思ふべし、虛身平氣は公正に到達するの徑路なりと雖も、人は元と神にあらず、到底天眞の至公至平ある事難し、喜怒哀樂の感情に依て動く者豈に

敢て公平を望まんや。

三八、青年の理想

新陳代謝は青年の理想なり、活動循環は宇宙の眞理なり、造次顚沛にも靜止する事なき萬象が、我等をして飽かしめざる如く、新陳代謝は清爽の氣を送て一倍の勇を增さしむるにあらずや、青年は最も心氣の活動せる人間の時代なり、精力の興奮せる人間の時なり、故に靜止を忌み陳腐を嫌ふ、靜止せずして活動し、陳腐は謝して新興代はるが故に、世は進歩すべく人知は進むべし、左れば青年は駸々として絶へず奔れる社會の駒に鞭つべき騎手あり、此騎手ありて始て文運の隆盛も見るべく、人生

の幸福も期すべし、革命若くは刷新と云へる過激を意味せる事態は、血氣旺盛の青年に恃たずんば行はれ難し、青年の活動は創設若くは破壞に在り、獨り守成の一事之を老者に托すべし、守成は靜止を意味し、青年の理想を去るものなればなり。

三九、健康は人生の第一位

「健康は有らゆる所有物中第一に位するものなり」と云へる西哲の言を味はずや、人生の最大急務はと問へば何人も生活なりと答へん、生活は健康に依て其の全きを得るものなれば生活を顧ふものにして健康を無視するものあらざるべし、健康は生活をして全からしむるのみならず、享樂も

亦健康に伴はるべきものなり、健康なければ人生眞の享樂なし、春秋に富める青年にして、知らず識らず健康を無視するの痴動を爲すは、誠に憐れむべきなり、青年の苦は前途遼遠なる樂を認めり、老年の苦は即時に免れて始めて樂を得、青年遼遠なる前途の樂土に到達せんには、相當の苦程を經ざるべからず、其の峻險なる惡路、苦程に打ち勝つべき健康を有するにあらずんば、遂に未だ彼岸に達せずして倒れん、乃ち健康維持の原則たる新鮮なる空氣、滋養ある食物、規則的運動、細心なる清潔、適宜の衣服、時間の憲正、此の六ケ條を忘るなからんことを望む。

四〇、習慣の力

孔子曰く性相近し習ひ相遠しと、人生れて其性は相異なる事遠からず、然れども生後習慣に依て著しく其性格の相距るを見る、習慣は教育に依て左右せらる、人類以下の下等動物に在ても適當の教育を與ふれば以て善習慣を成立せしめ得べきは家畜に經驗あるものゝ能く知る處、更らに生物にあらざる器物に於ても亦之を見るべし、彼の琴を愛する者が彈琴の妙手に依て琴音を慣らすを見よ、是れ其樂器の鼓動に良習慣を成立せしむるものにあらずや、況して靈ある人の習慣に於てをや、我等が日常勤勉して怠りなきの習慣あるに、若し數日を閑居して徒食せよと命ずる者あらば、我等は之に多大の苦痛を覺へん、若し懶惰の慢性あるものに對し日々規律ある苦役に服せよと云はゞ、彼れは大なる苦痛を感ぜん、

習慣となれば勤勉も自から勤勉と覺えず、無心に業務に從事して更らに疲るゝ事なきは、我等の經驗する處。

四一、社會は誠實の爲に成立す

人類社會の基礎は相互間の信用保障に在り、故に誠實は人類道德の中心なり、之を中心として凡ての行動は行はれ居るを以て、社會は誠實の爲に成立し居るものと見るも敢て差支なけん、我等は日々新聞紙を閲讀し書籍を披見し、兄弟と談笑し、知己と往來す、是れ皆信用を保障し人類道德を勵行すべき方便なり、然るに若し此等の機關が全く誠實を原則とせず、虚僞を以て蔽はれたりとせば、弱肉强食の慘と爲り、人類社會と他の下等動物との差は那邊に在るか知るべからざるなり、新聞紙も我等に猜疑の念を與へ、書籍も我等に險惡を敎へ、兄弟も我等に酷薄を送り知己も我等に殘忍を仕向るに至るものと爲らん、虚僞なる不德が、其人自身に大なる不利たるのみならず又他人を危殆に陷らしむるのみならず、第三者の眼にも極めて陋劣に映ずるを見れば、人生の天稟は誠實に成爲され居ものたるを知るべし。

四二、虚榮と眞美

肉體は觸目の假裝にして心靈は空茫の眞形なり、故に肉體の修飾は虚榮にして心靈の修養は眞美なり、人は石鹼を以て身體を清潔にし、之を善

美にして他の觸目の惡魔即ち病患を避けんとするに汲々たり、然れども心靈を清淨にして以て他の感觸の嫌惡を避けんと努むるものは少し、身體の不潔なるは人間同士に對して不快の念を與ふるものたるを知れども心靈の不潔が人間以上の神靈と交はりて甚しき不快の念を與ふるものたるを知らず、我は限りある壽命の肉體に於ては人間の交はりを爲すも、限りなき壽命の靈魂に於ては神靈との交はりを爲さゞるべからざるを以て肉體の修飾と同時に心靈の修養を爲さゞるべからず、我は人間に對する禮儀として肉の修飾を必要とすれども、是れ外を飾るの虛榮に過ぎず神靈に對する禮儀として心の修美を必要とするは即ち是れ內を修むるの眞美なり、形を美にして心の醜なるは是れ人生の大虛僞なり。

四三、言論の人と實行の人

言を壯んにするも行はれざるに於ては之を空論なりとして陋しむるもの往々にして之れあり、然れども我は思ふ、言にして理あるも時に遇はざれば之を行ふ事能はず、孟子が政論家を以て遂に之を施すなくして空論の人たるに了るも、其言論は後世時に會して行はれたるのみならず、今猶則とするもの多きにあらずや賴山陽の如きも吉田松陰の如きも、其政論は寔とに義と理とを兩全するものなるも時に遇はずして空論に了れり然れども彼等の議論は其死後に於て實行の時運に際會し着々として成功するものあるを見ずや、言論の人固より未だ必ずしも實行の人にあらず

實行の人亦必ずしも自己の理論を行ふに在らず、言論の人は宜しく議を建て策を献すべく、實行の人は須らく之を用ゐて以て其の美果を結ばしむるを期せざるべからず。

四四、老ふるも職業を捨てず

職業は必ずしも衣食を求めんが爲めにあらず、職業は人間の使命なれば何人も職業なかるべからず、万項の田地は數千俵の課調を採歛するに足るも、巨万の黄金は一家の奢を盡くして猶餘りあるも、漫然徒食するは人間たるの使命に背くものなり、天の人を造る既得の富を頑守せしむる爲めにあらす、其使命に向て活動せしめんが爲めなり、人天與の使命より云へば、生活問題の如何を問はず、各其の職業に勵むにあり、然るに往々にして五十歳六十歳に達すれば業務を休め退隱して晩年を送らんとの理想を懷くものあり、何ぞ誤れるの甚しきや、業務の結果が金を儲くると否とに關せず、身體健全にして働ける限りは働けよ、爲す事なくして徒食するは天に對する人間の罪のみならず自ら却て健康を害し、慰藉なきに苦しむに至らん。

四五、艱難條件を甘諾せよ

道程を經ずして千里を行く者あらず、左れば目指す彼岸に達するには、必ず相當の艱難を經路に費さざるべからず、其經路の艱難を忍ぶは彼岸に

樂しき希望のあるが爲めなり、便ち知る艱難は希望に對する天理の必然條件たるを、此條件を甘諾するものは成功し、之を甘諾し能はざるものは失敗す、農夫は盛夏炎熱の勞働を以て、秋期の收穫に對する欠くべからざる條件と爲して之を甘諾し居るが故に、收穫の實を擧るにあらずや、學生は螢雪の苦學を以て他日の成業に對する欠くべからざるの條件として之を甘諾するが故に成業の期に達するにあらずや、幸福を得んと欲する者は、苦痛を嫌ふべからず、若し痛苦と親む能はず、艱難の條件を甘諾する能はざる者は遂に成功の人たるを得ず。

四六、志士たらざれば勇士たれ

志達節操は心意の迫害に抗すべきの力なり勇健剛壯は肉體の迫害に抗すべきの力なり、前者を稱して志士と云ひ、後者を稱して勇士といふ、志士は言論を以て對抗の利器と爲し、勇士は腕術を以て對抗の利器と爲す共に是れ士風の振へるものなり、彼の便佞阿附にして何等の主張なく氣骨なきもの之を懦夫と云ひ、彼の戰慄痴疑にして驀進の勇氣なきもの、之を怯夫といふ、懦と怯とは薄なり弱なり事に當て忽ち挫折す、志と勇とは剛なり强なり、故に毅然として動せず、孟子曰はずや「志士は溝谷に在るを忘るべからず勇士は其元を喪ふを忘るべからず」と、然り志士は飢餓して溝谷に死するも辭せず、勇士は戰場に首を取らるゝも厭はず男子生れて穀虫と爲るを欲せざれば、宜しく志士勇士の一を擇べ、言論

の人たるか腕術の人たるか、士風夫れ二者の操と健とに依て興る。

四七、友人の嘲罵と闘ふは難し

人生固より波瀾に富めり、我等の周圍を包繞するもの、皆悉く喜怒哀樂の料にあらざるなし、喜怒哀樂、或意味に於て皆我敵なり、這中に起ちて克く之と奮闘するものは、則ち社會的の活人にして、奮闘の勇氣なきものは、社會的自殺の人なり、百万の兵馬と戰ふよりも一友人の嘲弄誹謗と闘ふは困難なり、之と闘ふて克つものは將に成功の人たらんとす、一友人の嘲弄誹謗と戰ふよりも、自己の欲情妄想と闘ふは更らに困難なり是と闘ふて克つものは既に成功の人たるを得しなり、喜んで而かも得意

とならず、樂しんで而かも墮落せず、怒て而して忍び、哀しんで而かも沈まざるものは則ち克己の人なり、自から一個の見識を有し、吾不義に隠へば萬金を與へんと云ふものを峻拒し、汝は痴なりと嘲けらるゝを笑つて謝するものあらば、我は其敬服すべき人たるを知るなり。

四八、死を恐れず生を怖る

人は其欲情に於て動物性的なり、愛情に於て理性的なり、兩性未だ解脱せざるの間は、眞の悟了の域に達したりと云ふべからず、死を以て怖るべしと云ひ怯るべからずといふ、皆是れ動物性と理性とより打算したる相違にして、猶肉体を本位とする感情を離れざるものなり、肉体を外に

して固死生ありや、彼の五十にして悟りたるトルストイは曰へり、「人の死を怯る所以は死を怖るにあらず生を恐るなり、死は人の未だ經驗せざる未知數にして果して恐るべきものなるや否を知らず、故に人は未だ知らざるの死を恐るゝにあらずして、既に知れる生を怖るゝなり、即ち是れ動物的にして同時に理性的なる自已の生存を怖るゝ感情あり」と然り肉体なるものに對して欲望あるが故に生存の長からんを求む、是れ幸福は肉体以外になしと思惟するが爲めならんか。

四九、二種の生命

肉體の生活以外精神的生活を有するものにあらざれば人といふべからず肉體の生活は人類以下の動物皆之を有す、唯夫れ人が下等動物と異なる所以のものは其形に於て異なるが爲にあらずして精神的生活を有するが爲めのみ、トルストイの曰ふを聞けよ「人には二個の生命あり、一は肉體の誕生に初まり死亡に終る生命是れなり、之を動物的生命と云ふ一は自己の生存を自覺するに於て初て生ずべき人の理性的意識の生命是れなり、之を靈的生命といふ」と、誠に然らずや、如何に肉體的生活に傲り動物的生命を保つも、仁と愛との理性に缺くる處あれば是れ精神的生活を失ふものなり、人類としての自己の生存が互を益するにあらずんば、生存の甲斐なきなり、肉體的殘骸存るも理性的意識の生命にして既に亡びたらん者、誰か之れを萬物の靈長と云はん。

五〇、人生と飲食

人は何の爲に生れたるやの問題よりも、更に緊切なるは其何の爲に生れたるに拘はらず、一旦生れて現世に出でたる以上、其生命を保全せざれば、出現の任務も目的も之を果す能はざる事を知らざるべからず、故に生命の保全は人生目的の第一門なりと云ふを得べし。如何なる哲學者も道德家も宗教家も飲食を求めずして生存する事能はざるべく、生存する事能はずんば人生を濟度する事も人生に幸福を送る事も爲し能はざるなり。上下を通じて孜々汲々日夜米鹽裘葛の爲に勤勞し居るは、宛も飲食の爲に生れ來りたるが如き觀あるも、飲食の爲に生れたるにあらず、活

きんが爲に飲食す、活くるは則ち人道の目的を果さんが爲にして、飲食は則ち其目的に到達すべき手段として生命を保全せんが爲ならずや。

五一、人生と勤勞

人は目的の爲に活きざるべからず、活くる爲に飲食を漁らざるべからず勤勞は即ち飲食を漁るの方法なるか。然らば飲食の料に豐かなるものは勤勞の要なきが如し。勤勞の意味豈に斯の如きものならんや。勤勞なるものを人間が天地に對するの義務とする形而上の解釋は姑らく措き形而下に於て之を見るも人は社會的動物たる以上相互的生存を要す故に他の勤勞者をして生存せしむるにあらざれば、自己の富資は空寶にして、遂

に生存の資たる能はざるなり。故に他の勤勞者をして生存せしむる爲に富資ある人も亦相當の勤勞に服せざるべからず。富者たると貧者たると知者たると蒙者たると、上位に在ると下位にあるとを問はず、精神若くは体力上に於ける勤勞は意義ある人生の爲に活きんと欲するものゝ廢すべからざる事なりとす。

五二、人生と競爭

人生れて死するまで競爭を續けて倦む事なし、殆ど人生競爭を以て目的とするかの如き觀あり、然れども競爭は目的にあらずして、目的を果すべき手段の一たるに過ぎず。人は目的の爲に活きざるべからず、生存を欲するが爲に、自己を害するものを防ぎ、生存を欲するが爲に、食物を爭ふ、觀じ來れば其狀禽獸と擇ぶ處なし。唯禽獸は生存のみを目的とし人は其れ以上宏遠なる道の大目的あるを異にするのみ。各國相對峙し、遂に干戈を動すも、或は名譽維持の爲にし、或は權力擴張の爲にし、或は商業擴張の爲にし、或は人民掩護の爲にす、要するに皆是れ生存保全の爲の競爭なりと雖も、其生存を保全せざるべからずば、更に人生宏遠の目的あればなり。

五三、人生と知識

人は飲食、勤勞、競爭のみを以て本能とすべからず、動物を離れたる人

としての知識を要す、吾人の心身は一國一社會の要素たり、心身不完全ならん乎、一身の利達幸福を享くる事能はざるのみならず、一國一社會の進歩改良をも企る事能はざるなり。之を以て吾人は常に身体を健康にすべき知識を求めて止まず、又學藝を修得して技能的知識を求めて止まず、道德を養成して人格的知識を求めて止まず、是等は吾人が單獨の目的を以て求むるものにあらず、之に因て社會の幸福を進め之に因て國家の福利を增し、之に因て人生の目的を達せんと欲するなり。人生より知識を除かば、無味沒趣にして只夫れ食を爭ふ豺狼の如きのみ。

五四、人生と良心

良心は吾人の行爲の主宰者なり、人生れて直ちに行爲あり、之を主宰する者なくして可ならんや、意思は行爲を支配するものなれども之を主宰するものは良心なり。人生れて意思の備はると同時に良心なるものを有す、良心は他の能力の如く經驗集積に依て得るものにあらずして先天的に之あるものなり。之ありて始て人生は暗黑より免れて光明の天地に在るを得べし。良心は人生行爲の善惡を鑑別すべき明鏡なり。人生行爲の美醜を計るべき尺度なり。若し人生より良心を除かば、懺悔なく反省なく信念なく、人は禽獸の如く、酷薄なる生存の競爭を爲して何等怪しむ處なかるべきなり。

五五、人生と忠孝

忠孝は人倫の大本にして吾人の行爲中最高の行なり。此倫理が人生に必須事として生じたる所以のものは共同的人生の秩序を保ち、共同的人生の幸福を保障し共同的に其生存を保全せんが爲のみ。故に忠孝は單獨的利益と背反して相容れざるものなり。然れども向上せる人類が社會を組織し、國家を形成して、其同族の幸福を享有せんと欲する爲には、斯る犧牲的熱烈の心情を促して之を最高の道德と爲さゞるべからず。野蠻にして國家を爲さゞる社會には、此道德を要せざるも、苟くも人類同族の幸福を保全する方便として國家を形成し、國家といふ一大權威に依て生

命財產の安固を保持せんとする社會には、必然の要求として此道德は生るゝものなり。

五六、國家

統治權、領土、人民の三要件具備して始て國家存す。一定の領土版圖されずんば、民族あり主權者あるも、亦は族團にして未だ國家にあらず。領地あり且つ之を有する者あるも、人民なくんば統治の用途なけん、未だ以て國家といふ可からず。人民あるも領地あるも、統治權の處在明からならざれば、治平の道なし、未だ國家といふべからず。故に國家は統治者の私有物にもあらず、人民の共有物にもあらず。人民と統治者との間

不文的公正の約束に據て保有さるゝ一の有機物なり。國家は統治者以外に於て、統治者と人民との投合意思に依て活動する機能を有す。之を明確に文書に現はすもの即ち是れ憲法にあらずや。

五七、天下の天下

天下は天下の天下にして一人の天下にあらずと道破せる古聖の言や千古不磨なり。國家は國家の國家なれば一人の私すべきものにあらず。上杉治憲が「人民は國家に屬したる者にして我私すべきものにあらず、人民の爲に立ちたる君にして、君の爲に立ちたる人民にあらず」と云へる如く君ありて民あるにあらず、民あつて而して後君あり政を行ふの有司

徒らに袞龍の袖に隱れて民の心に反くは、此意を誤るものにして、朧て君民の間に危き思想を湧起せしむるものと知るべし。有若が哀公に曰へる事あり、「百姓足らば君孰れと與にか足らざらん、百姓足らざれば、君孰れと與にか足らん」と、蓋し君と民とは樂苦を與にすべく、異身にして國家の同躰なるを云ふなり。

五八、犧牲

西郷南洲曰く「命もいらぬ名もいらぬ官位も金もいらぬ人は始末に困る然れども此始末に困る人なくては艱難を共にし國家の大業を爲す事能はず」と。是れ自我の全部を犧牲に供するの大悟にあらずや。人或は此語

を以て乃木大將が「命にかへて名ころ惜しけれ」と云ひしと反對の思想なりとせん。而かも反對にあらずして一致なり。乃木の所謂名ころ惜しければ名譽欲しさの意にあらず、名を汚すを惜むの意なり。南洲の名もいらぬは名譽を貪らずの意なり。其自我の全部を擧げて國家の犧牲とする赤誠に至ては即ち一なり。

五九、機會

機會は刹那に在り、其瞬間を失へば呆然自失する事あり。機會は我に美觀を與ふ、而かも他をして憎惡せしむ。機會は我の爲に壯快なり。而かも他をして悲ましむ。機會は直覺的に可なり、而して靜思的に非なり。機會は氣合に依て得べく、伸氣に因て失ふべし。機會は敏活に因て捉らふべく緩慢に因て逸すべし。機會は一度限りのものにして再び得べからず。機會は前面的の獲物にして、裏面を望めば失望すべし。機會は捉らふる時に捉らへざれば長く來らず。誰かの言に「機會は前頭毛髮を有すれども後頭は禿せり」と、穿てるかな。

六〇、政道の要

政道の要は民心を收攬するに在り、民心の收攬は輿論を以て其身を護るに等し。ペトラーク曰く「帝王の最も確實なる護衛は兵にあらず金にあらずして民心なり」と是豈に帝王のみならんや、政道を治むる者皆然り

荀子は曰く「君は舟なり庶民は水なり、水即ち舟を乘せ水即ち舟を覆す」と然り利も民なり害も亦民なり。木戸孝允曰く「政府は人民の爲に設くる處にして人民は政府の使役に供するものにあらず」と政道を行はんと欲する者民心の收攬に注意すべきや此の如し。古來聖人仁義を說て治國平天下の要道と爲すもの、蓋し之が爲のみ。

六一、共同心

人は孤獨的に生息するものにあらずして、社會的に活くる者あり、社會に尊ぶ處のものは共同心なり。共同とは或る程度まで自己を沒して他人の意思を迎へ自他共通の利益を發見して、之を保障する提携的行爲なり

故に共同の實を擧ぐるには、自己犧牲の道念なかるべからず。集團の各個人が各々此道念を有するに因て、始て共同の善美を得べし、市町村の如き自治体も、共同的結合なれば、市町村氏の犧牲的心性の發揮に依て自治の實を擧ぐるを得べく、人は如何なる場合にも自他の利害は多少の衝突を免れざるものなり、專ら自己の利益のみを思ふて多數人の害を顧みざるは、共同心の缺乏なり。多數の爲に自己の利益を犧牲にするは、則ち共同心の發作なり。豺狼食を爭ふて相呑噬する、其酷薄の狀は禽獸に共同心なきを語るものたるを知らば、人は共同心に活きて禽獸と遠かざるを要す。

六二、無私無慾

如何に善行を爲すも、自から之を語て聞達を求むるは、私慾の人たるを免れず、多くの慈善家と稱する者、其義捐金の多きを誇り、其慈善家たるの名を賣らんと欲す。是れ名譽上の私慾ある僞善家なり。物質上の利慾ある者と、其心事甚だ遠からず。之に反して他人の喜憂に同情し、「彼の地位に汝の身を置け」の言を信じ、「天下の憂へに先ちて憂へ天下の樂みに後れて樂む」の語を踏み、他人の悲境に我を比して一片俠氣の發する處、之を無私無慾といふ。私なきものは公の爲に敢然として犧牲と爲るを辭せず、而も其德を他に知られんことを望まず、慾なきものは爭ふて利に附くを欲せず、又名譽をも貪らず。故に無私無欲を隱德といふ隱德ある者必ず陽報あり、慾なきに果報の至るは天の德なり。

六三、青年の表象

青年の好む處は、安靜なる逸樂にあらずして、激烈なる精神狀態に在り穩寂の氣分にあらずして、剛健の氣象に在り。故に坦々たる平地を走るよりも、峻嶂の山岳を行くを快とすべく、油の如き水面を駛るよりも、怒濤激浪の間を驅るを壯とすべし。未來少き者は漸く沈靜し易く、愈よ靜なるに及んで死す。未來多き者は興奮し易く、益す奮て進む。青年は未來に富む、故に沈靜を欲せずして興奮を求む。青年は常に激烈なる精

神狀態を味はんことを欲して自己の感情を動かすものを求む、故に激烈と剛健と興奮とは青年の表象なり。感激性なきものは亡國の民にして、感奮性なきものは老耄の輩なり。吾人は青年に旺盛なる感激性あり、熾烈なる感奮性あるを尊ぶ。亡國の民たる勿れ、老耄の輩たる勿れ。

六四、健康

勇氣は健康の胎内に宿う、成功は健康の胎内より生る。嚴格なる意味に於て、人生健康の如くの愉快あらざるべし。ウオルトンは云へり「健康は道德に次で尊重すべし」と、道德は人生の絶高行爲なり、人たるの價値を備ふるに於て、最貴重のものなり。之に次で人生の意義ある一生を終らんと欲するに必須なるは健康なり。ビツケルスタッフは曰へり「有らゆる處有物中第一に位するものは健康なり」と、人生れて技術を處有し、藝能を處有し、德行を處有す、然れども健康を缺く時は其處有物の何物をも發揮する能はずして歿せん。左れば健康を以て人間處有物の第一位と爲す、豈に理あらずや。青年は勇氣に生きて成功を目的とすべく技術、藝能、德行を修むるに先だち、須らく先づ健康を保つべく其体力の練磨を要とす。

六五、靈に生きよ

命は一朝にして絶つべく、風前の燈火、葉頭の露の如し。靈は永へに生

きて、天地と窮り無し。命に生くる者は肉盡きて死し、靈に生くる者は死して滅せず。楠公逝きて五百年、今猶在が如く、人皆湊川の廟を拜す是れ楠公の靈、恒に吾人を指導するが爲なり、謝榜得の悲憤は、青史に留りて活けるが如く恒に吾人を興奮せしむ、リンコルンの義勇は、同胞相愛の至情として、今猶人道の神たるを偲ばしむ。忠誠の爲に生死を擇ばざりし吉田松陰や、義の爲に死を見る事歸するが如きジャアンダークや、大君のみあと慕ふて殉死し、以て教訓を遺せる乃木大將や、皆是れ世界史上の義人として、芳を萬世に遺すものなり。渠等が永世尊敬を世人に絶たれざるは是れ、死して滅せざるものにして靈に生きたればなり。

六六、言は行の表

言は行の表なり。行は言の實なり。所謂言行一致は其表實相件ふものにして、之を崇しと爲す。容易に言ふものは容易に行はざるの人なり、漫に語るものは眞に行はざるの人なり。言へば必ず行はざるべからざるを思へば、其言自づから愼重ならざるを得ず。言の爲に過つ者は、行の爲に過つ者よりも多し。聖人は云へり「駟、舌に及ばず」と、盍し駟馬の駿を以てするも、一度び出でたる舌端の言は、之を逐ふて取り返す事能はざるを戒めたるなり。然れども言裏必ず責任あるを知る者にして、云ふ能はざるは責任を避けんと欲する者なり、其言はざるの罪惡は虛を言ふ

の罪惡と擇ぶ處なり。唯漫に言ふを戒めて、行の表たる事を覺悟せざるべからざるのみ。

六七、模倣と補短

模倣は眞似なり、補短は足らざるを補ふなり、模倣は時に危き事あれども、補短は常に有益なり、長を助けて短を補ふは、向上の基なり、然れども長を誇るは危き事あると同じく、模倣も亦必しも悉く之を斥くべきにあらざるなり、過ちを改め、善に從ふて流るゝは又一の模倣に類すれども、是れ決して危からざるなり、只天稟にあらざるを眞似んと欲し、若くは、己れの長を誇りて他に乘せらるゝを知らざれば則ち危し、鵜を眞似る鴉は水に溺るゝの危きを知らざるものなり、己が美容を誇りて、虎獅の接近し來るを知らざる孔雀も、亦危きを知らざるものにあらずや吾等は自己の天稟を知て滿足すべく、吾が美に憧憬して來る者には警戒すべし、近年日本の風光を賞して來觀する外客多く、日本民族をして歐米を模倣せしめんとする誘惑多きは警むべきの一現象にあらずや。

六八、古人に媚ぶる勿れ

霖雨霎々氣鬱たり、外訪に懶うくして獨り書齋に古人を友とす。米菴云へる事あり、曰く「人閑居の時一刻も古人無かるべからず、人落筆の時一刻も古人あるべからず、平居して古人あれば、學力方に深かるべく、

落筆古人無くして而して精神始て出づ」と。是れ米菴が書道の一訓なりと雖も、取て以て吾人が修戒と爲すべきなり。閑居妄思を矯むるに古聖の言行を以てし、暇を補ふに學問を以てす、是れ知德を養ふて自己立脚の素地を造る所以なり。一度び筆を採て墨汁を下すに當ては古人の糟粕を嘗め古人に媚びて模倣を巧みにするは、是れ自己の識見を沒するものにして、學得修養の價値何處にかある、宜しく獨自の創見を發揮して始て自己の存在と價値とを示すべきのみ。豈に獨り書道のみならんや、人生れて世に處す須らく此意氣なかるべからず。

六九、獨創の人たれ

先人の糟粕を嘗めず、宇宙の神秘を開きて一新理を發見し、爰に一見識を立て人生の福祉を進むべきもの、之を獨創といふ。世は獨創に因て進歩し獨創に因て改善さる、文明も開化も是れ獨創の影象なり。世に獨創無くんば千古動かず原人蠻境を脱する能はざるべし。吾人は信ず人生の意義、之を一言にして盍へば獨創の爲めに生れたりと。古人幾多の發見創說を爲すも、宇宙の萬衆眞理は無限なり、古人に依て發見されたるものは九牛の一毛にも及ばず、誰か創見の餘地なしとせんや。哲理も學術も、技藝も、善も、美も、現に發見されたるもの以上、幾多の神秘は無限に伏在して、之が闡明發見を待ちつゝあり、其神秘の寶庫を開くものは夫れ獨創家なり、古人の跡を逐ひて他を知らず、以て吾は學び得たり

といふもの、吾人は之を無用の死學と云ふ。古人に學んで古人に阿らず以て創見の人たらざるべからず。

七〇、偉人とは何ぞや

偉人とは何ぞや、形而上に將た形而下に、絶倫の功業を以て、過去に生れ、現在に活き、而して又將來に生れ、無限に人生に福祉を送る偉なる人格なり。世界の歴史は偉人の傳記なり、とは是れカーライルの言、然り歴史は時代的偉人の傳記の連續なり。渠等が活舞臺に立て演ぜる行動の記錄なり。偉人は世界と稱する劇場を飾る大なる俳優なり、地球と云へる庭園を彩どる爛漫たる花なり。世に偉人なくんば劇場に俳優なく庭園に花なきが如く、人生は秋風落寞の感なくんばあらじ。偉人は寔に神秘の發見者なり、福利の引導者なり、文明の創造者なり、善美の作者なり、驚嘆の喚起者なり、慰安の恩惠者なり。世に偉人なくんば人生は暗黑なり、光明の扉の鍵は實に偉人の手に在り。吾等が法治國の下に安寧の生息を爲すも、秩序ある社會に生活を安んずるも、學術技藝に要求を充すも、信仰の下に安心立命するも、皆是れ偉人の賜ものなり。

七一、女子の美戒

女子は先天的に審美的性格を有す、故に美を好愛するは女子の天性といふを得べし、是あるが爲に往々にして華奢虚樂に流れ易きを免れず。唯

之を自から戒めて質素粗容に甘んずると否とは、克己心の強弱如何に在るのみ。固より優雅は女性美として尊重する處なれば、容姿を整飾すべき身たしなみは女子の怠るべからざる處。然れども己が美を誇らんとする時、背後に恐るべき誘惑の魔の窺ふあるを知らざるべからず、倫落は則ち之より來る、警めざるべけんや。孔雀が絢繚の長尾を張て自から其美を誇るの時、虎獅の狙ふあるを知らざるは孔雀の愚なり。容色を美にするの女子、孔雀の誇りに陷る事なきを戒めよ。

七二、艱難と闘へ

越王勾踐吳を破て歸るの詩あり、何ぞ夫れ意氣の揚々たる、青年學成り名遂げ、而して其里閭に還る、當に此思ひあるべし。鄉黨門に滿ちて其成功を祝し、酒池肉林の筵を展べて歡呼湧く、正に是れ宮女花の如く春殿に滿つる勾踐の悅びと似たらずや、而かも悅びの前提には辛酸苦惱あるを知らざるべからず、勾踐の戰勳豈に順潮に楫さして得たるものならん。艱難人を玉にするの語果して吾人を欺かずとせば、青年學成るまで名遂ぐるまでの辛酸と苦難と闘ふ事幾十合あるを覺悟せざるべからず。之に堪ふるは只夫れ健忍不拔の堅志あるのみ。諺に曰ふ苦は樂の種、青年勾踐の歸來揚々たるを學ばんとならば、須らく苦難と健闘するを厭ふべからず。

七三、貧樂富禮

貧しき者多くは苦悶して自から慰むる能はず、富める者多くは不遜驕奢にして禮に嫺はず、共に賤劣の輩なり。貧しくして樂み、富んで禮讓あるものは稀にして共に高潔崇德の士なり。子貢孔子に問へる事あり、貧くして諂らふなく富で驕るなきは如何と、子答ふらく、貧しくして樂み富で禮を好むに若かずと、豈に夫れ徹底せる德行の道破にあらずや。貧者は物質に憧憬して富の前に膝行叩頭するを恥ぢず、富者は傲然として驕奢を極め、他の羨やむを見て得々たるは、今の社會の實態にあらずや其富に諂らはざるは潔く其富を驕らざるは善なり、而かも貧しきに居て

自から富み、富んで禮讓あるの德高きに如かざるなり。貧者樂まずんば慾情燃にて害を作し、富者禮なくんば驕り長じて亂を爲す。兩者自から矯めて樂に活き禮に居らざるべからず。

七四、神童に英雄なし

幼にして才學ある者世人稱して神童と云ふ、神童推奬すべきか推奬すべからざるか神童に英雄なしの語、吾人を欺かざるを奈何せん。才學ある者勇膽なく豪氣なし、而して慢心を生じて小器に得々たる者比々皆然り早熟するものは夭折し易く、小成する者は大器にあらず。幼にして才學秀づる者多くは長じて凡庸の輩たるを免れず。之に反して幼にして鈍庸

と侮られ、低能と卑しまれたる者にして、長じて英雄豪傑と爲りたる者古來少からず。此れ敏才なきも勇膽豪氣に富めるが爲ならずや。才學秀つる神童と、豪邁勇剛の怪童と何れか優る、拔山倒海の氣魄は神童に望ひべからず、豈に天下の大器たるを得んや。

七五、義と利

天下義に滿つれば正しく、擧世利を逐へば邪しま多し。正しければ則ち平かにして恒に治る、邪なれば則ち平かならずして恒に亂る。故に古人は云へり義利に勝つを治世と爲し利義に勝つを亂世と爲すと、宜べなるかな。亂は必ず利の爭奪より生じ、治は必ず義の橫溢に基ひす。意志は義の府にして情は利の府なり、意志克く慾情を抑へて以て之を制せば、則ち義利に勝つべし。慾情の勢ひ獰猛にして、遂に意志の力を征服せば則ち利義に勝つべし。然れども利必しも斥くべきにあらず、只正當の利權は之を尊重すべし、自己の利權を尊重する者は他人の利權をも亦尊重すべし、之を是れ義と云ふ。自己正當の利權を重んぜずして妄利を貪婪する者は他人の利權を重んぜずして、却て之を侵害す。之を是れ不義といふ。

七六、寒饑は惡事の始

雕文刻鏤は農事を傷くる者なり、錦繡纂組は女工を害する者なり、農事

傷けらるれば即ち饑の本と爲り、女工害せらるれば即ち寒の原と爲る、饑寒並び至りて而して能く非を爲すあきは寡なしと云へる語あり、農家は質朴を以て淳とす、彩飾的彫刻や金玉を鏤ばめたる家屋を造りて其美を誇る時は、農事は蔑しろにせらるを免れず。女工は質素にして無垢なるを尊ぶ。錦繡綾羅を飾る時は、勤勞は虛榮の資を得んが爲に止りて、遂に女工は其一身を損するに至るを免れず。農村の青年が都會を憧がれ工場の女子が虛榮に囚はるゝ、近代の時流は軈がて男子をして饑に泣かしめ、女子をして寒に叫ばしむるの基ひと爲る、衣食の資乏しくして遂に惡事を爲すに至る。嗚呼寒と饑とは惡事の基ひなり、儉約勤勉は寒凍と饑餓とを撃退するの利器なり。

七七、富貴と同情

富貴なる者に望みたきは同情なり、同情なき富貴は、心驕り体奢る、貧しき同胞を卑しみ、賤しき婢僕を蔑しむ。又道を聞て笑ひ、義を見て感ぜず、只自から安逸を是れ貪ぼり、偶ま同胞の災厄を憐れむ事あるも、衷心の憐愛にあらずして、名を賣り恩を賣り、以て驕傲の料とするに過ぎず。同情あるの富貴者は恭儉自から居り、隱德を施して語らず、自から待つ事薄くして公に奉ずる事厚し。明治天皇が「もつ人の心によりて寶ともあだともなるは黄金なりけり」と御製あらせられしは、克く富者の心情を御道破ありしものなり。富貴に居るもの心して可なり。

七八、青年は負債者

青年は時代の負債者なり、先輩の遺したる二十億圓の國債を返濟すべき義務を負ふべき將來の國民たるが故にあらず、道義に上に於ても亦負債者なり。「親の恩は子に返せ」と云ふ諺あり、西洋にも亦「親より受けた恩は借り入れたる金と同じ之を子孫に返すは其金を返濟すと心得べし」といふ諺あり、親の恩は無限なり親一代に事へて孝養を竭すも猶報恩足らず、子を養育するの義務は、即ち親に對する報恩の不足を返すものと知らざるべからず、青年は親恩を受けて未だ返さゞるの境に在り。故に曰く道義上の負債者なりと。

七九、知と暗

人は生れながらにして賢愚知鈍の別あり、然れども幼にして識別し難きもの多し。是等をして同一の出發點に在らしめ、同一の教育を施し同一の經路と年月とを歴み少年に爲るに及んで其賢愚を識別すべきものあり又長じて壯年となり社會に立つに及んで始て成功不成功の分るゝものあり。天性の賢愚は之を如何ともすべからずと雖も知暗の差は學問に在り壯にして成功すると否とは、其努力の分量の如何に據るのみ。古人の歌に「綠なるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける」と云ふあり味ふべからずや。

八〇、讀書の要　其ノ一

古賢も云へり、悉く書を信ぜば書無きに如かずと。書籍は如何なるものも之を渉獵すべし、然れども如何なるものをも悉く信ずるは謬り多し。書籍の人を誤らしむるもの少からず、故に之を讀むには、著者に阿らざるを要す。著者必しも萬能の人にあらず、必しも人格崇き人にあらず、必しも賢明の人にあらず。而して云ふ處、行ふ處と一致せざる者多し。吉田松陰は云へり、讀書の要は聖賢に阿らざるにあり。孔孟も生國を出でゝ他邦に事ふるは非なりと。是れ孔孟を學ぶ裡にも其行ひを非難する卓識ありしなり。渠は孔孟の言にして取るべきを取る。然れども孔孟

が自己の說容れられざるの故を以て生國の君を捨てゝ去るは、日本の大義に一致せざる不義の行ひなりと喝破す、凡そ書を讀むもの自から先づ一見識を持して、而して著者に臨まば誤り無るべきなり。

八一、讀書の要　（其二）

渴せざる者に水を侑むるも喜ばず、餓えざる者に食を侑むるも喜ばず、好まず、求めざるに之を强ふるも、何の益かある。嗜む趣味は感興深けれども、嗜まざる趣味は印象なし。書を讀むも亦然り、自から好まざるの書百卷を讀むよりは、好める書一卷を讀むの勝れるに如かず。エマルソン曰く「我好める書に非ざれば讀むべからず」と、好愛なき書は之を讀

む事幾十回なるも何等腦感を動かす事なく、腦感動かずんば讀書に何の價値がある、畢竟時間を費すの損失を認むるの外、何ものをも殘さゞるべし。讀書の要は自から好愛する所の書を擇ぶにあり。

八二、讀書の要（其三）

讀書は該博なる人を造ると云ひ、讀書の時間ほど面白くして且つ幸福なるはなしと云ふは、好める良書に對するの言なり。其反面に於てはルーソーの云へる如く「書籍を濫用すれば學問を殺す」のである事を覺らざるべからず。讀書は多く感觸を動かすに足るものなり、一定の學問を受け、其學說を信ずる者にして他說の書を讀み、說を變じ學を害する事あり。又學問に據て其所見を定め其德性的人格を造りたる者が書籍濫用の爲に其學問を殺し、德性を損する者亦尠からず。讀書は濫りにすべからず、之を擇ぶ事、恰かも友を擇ぶが如くすべし。

八三、讀書の要（其四）

ポックストン云へる事あり「一書を讀み了らざれば、決して他書を讀み始むべからず、書中の意義悉く了解せざる間は、決して他書を思ふ可らず、且つ何事を學ぶにも全幅の力を用ふべし」と是れ讀書の努力をして徹底せしめんと欲するの意なり。朝たに此書を讀み夕べに彼書を繙かば知識と記憶とは頗る散漫と爲り、何等纏りたる知識を得べからず、徒ら

に勞して其功なきに了らん。一書の開卷より始めば先づ其書を讀了し、其意を會得し、自から書中の人と爲り書に對しての感化を認め、而して後、他の書籍に移らざるべからず。然らざれば學ぶ處は浮薄にして、讀書却て將來を愆るに至らん。

八四、鳳は粟を喙まず

自から尊び自から重んずる者は、小群と爭はず、小爭は自己の品位を下落せしむる外、何物をも穫る事能はざればなり。燕雀は鴻鵠の志を知らず、韓信克く斗屑の輩の股下を出で、恥を忍びたるもそれが爲なり、若し夫れ爭ふべきあらば、猛然として起ち、起ちて以て其大を爭ふべし。猛

虎嘯ぶけば則ち風生じ、怒れば則ち百獸震怯するの慨なかるべからず。李白曰く「鳳は飢ゆれども粟を喙ばまず、食ふ所は只琅玕、焉んぞ能く群鷄と刺促して一餐を爭はん」と學ぶべからずや。

八五、讒は猜疑より來る

自から潔よくせんと欲せば、他の猜疑を招かざる事を勗むべし、猜疑は固より小人の事なりと雖も、小人をして猜ましむるに至るは既に不德なり。恭謙自から居り、功を他に讓り、才に乘せず、知を負はず、色を恃まずんば、以て猜みを免るべく、瓜田の履李下の冠を愼まば以て疑ひを免るべし。疑はるゝ處には行ひの欠陷あり、諺に云ふ火なき所に烟立た

ずと、昧ふべきなり。蘇東坡曰く「物先づ腐つて而して後虫之に生じ、人必ず疑つて而して後讒之に入る」と。疑ふ者腐れるか疑はるゝ者腐れるか、容易に斷ずべからず、讒之より入て人格損はる、疑はるゝ事なきに如かざるなり。

八六、長行足下に始む

始あらずして終りあるものなく、家門を出でずして大山を跋沙するものなし。學ばずして道を知るは難く、錢を積まずして巨富を求むる能はず大なる望みを遂げんと欲する者は、其始め踐行に甘んぜざるべからず、豐公の偉業も信長の下郎たりしが爲なり。老子曰く「合抱の木は毫末より生じ、九層の台は累土より起り、千里の行は足下より始まる」凡そ物序を經ずして進む能はず、貴を得んと欲する者は貧しき働きより起らざるべからず、貴を得んと欲する者は賤しき地位より進まざるべからず、青年は人生處世の第一歩に在るもの、苦きに恐るなく、勞を厭ふなく之を累土として九層の高さに登るを期せざるべからず。

八七、牽牛花の戒

牽牛花は朝たに美花を開て夕べに萎む、一花落ちて一花開くの時、早く既に實を結ぶ。彼の命數は只一夏に終るのみ、是れ功を急で大成せざるものにあらずや。青年の春秋に富む前途洋々として長じ、成功を急いで

命數を縮むるは愚なり。春を經ずして秋の來る事なく、花を見ずして實の結ぶ事なし。青年は人生の春なり、人生の花なり、此好季節に其美花を開かしめ更に炎天酷熱の盛夏と鬪ふて、而して秋の實りを待つべし。花と實と一時に見るは牽牛花あるのみ。フキールド曰く「木に花のある間は其實を食ふ事能はず」と、青年食ふに足るの實と爲らんと欲せば、花の時代を完美にすべし。

八八、知識の慾求

小兒は知識慾最も旺盛にして、事々物々眼に觸れ耳に觸るゝもの、一として幼き渠の研究に入らざるものなし、青年に成るに及んで、其知識に理解的能力を備へ益す探究的知識慾を增進す。知識慾の熾烈なる間は、之に伴ふて記憶力の旺盛なるを見れども、老ふるに隨て知識慾衰へ、記憶力亦衰ふ。人間奮鬪の間は常に名を得富を得んことを希望する如く、知識の希望も亦旺盛なれども、奮鬪の時期過ぐるに依て一切の慾求なし元氣旺んなる間は、スタインの云へる如く「知識の希望は富の渴望の如し之を得るに從て愈よ增加す」元氣なくして一切の慾求なし。知識的慾求絶へて人事終る。

八九、眞の敎育家

ツエーケル曰く「我が生徒を愚なりといふ敎員は自から其身の不善を證

するものと謂ふべし」と。然り教育家は如何なる愚生をも之を賢明にし如何なる不良兒をも之を善良にするの感化力なかるべからず。單に學術技能を授くるを以て教育家の能事足れりとするは誤なり。故に其教ふる生徒に一人の愚者を出さず、一人の不善者を出さずして始て自から完全なる教育家なりと云ふを得べし。然るに我生徒の愚を語り我生徒の不善を語て自から恥ぢざるは、自己の不善を告白して恬然たる者なり。理想境に活き而して實社會に活きざるべからざる教育家の任や、一价の行政者、一价の文學者、一价の美術家の儔にあらざるなり。

九〇、金錢は品行

リットンは曰へり「金錢は品行なり」と簡にして而かも至言なり。古人が錢に近づかざるを以て潔しとしたりし思想は今の世に應用すべからず金錢は生活上必需の寶なりとせば、之を避くる者は生存競爭の圈外に放逐さるゝ劣敗者なり。唯金錢に對する態度如何に依て、其人の品性を覗ふべきのみ。金錢は生活問題に直接の關係あるだけ、其だけ人間の憧憬を深くす、犯罪も金錢に出で不德義も金錢に出づ、對金的態度こそ、實に人間善惡の品定さるべき尺度なり。使ふも金使はるゝも金善くなるも金、惡くなるも金、苟くも品性素行に關する事、金錢を離れたるものあらじ。金錢は品行なる哉。

九一、妥協

妥協とは何ぞや、自己の意思と他の意思との衝觸點を避けて、互讓的に自我を曲げて妥融協合するの云なり。是圓熟せる美德の如く、將た卑怯なる劣行の如し。由來妥協は斷行の第一線と兩立せず、第二線第三線に於て其實行を見るべきのみ。青年は第一線の勇者なり、故に妥協の文字は青年の字書にあらざるべし。境遇と妥協し、生活と妥協し、情實と妥協し、經驗と妥協し、時代と妥協し、問題と妥協するは圓熟せる老年の事にして、直角的に進む青年の取らざる處、主義と兩立せざる妥協に依て主義以外の主義を發見しそこに自己の存在を置く巧妙圓熟ある手段は老

老年に因て初て得べきのみ。

九二、運命と勇氣

運命とは何ぞや、人間の頭上に落下し來る、幸不幸の境遇なり。此境遇は天爲のものなりや人爲のものなりや。人多ければ天に勝ち天定て後ち人に勝つ。天爲も半ば人爲的努力に因て定る、人力の及ばざる處は如何ともすべからざれども、竭すべきを竭さずして天運を待つは愚なり。所謂人事を盡して天命を待たざるべからず。セネカ曰く「運命は富を奪ふを得るも勇氣を奪ふを得ず」と。然り富は人爲に依て得、人爲に因て失ふ、運命は克く之を奪ひ得べし。然れども勇氣に至ては運命の神も之を

如何ともする能はず、既に運命の神をして其手を拋うたしむ。是れ勇氣の眞力なり、運命を挽回し運命を新造するものは、夫れ勇氣なるかな。

九三、音樂の德

古人禮樂を說て治國の要道と爲す、蓋し禮は行を正す所以にして樂は心を和ぐる所以なり。花笑ふて芳香風に送らるゝの時、喈々たる鳥啼は如何に吾等を喜ばしむるよ、秋寂びて物悲しき夕べ唧々たる虫音は、如何に興趣を吾等に與ふる事よ、猛獸も靜琴簫笛の音を聞て暴意を挫く。節奏緩急其度に稱へば、劉唬として梁上の塵を躍らすと云へり、鳥の聲を美と云ひ虫の音を韻と云ひ、溪泉の流聲を幽と云ふも、皆是れ人類が先天的音樂趣味を有すればなり。音樂は慘虐なる人生を調和するものなり。只夫れ耽けざるを可とせん。

九四、忿怒の警め

喜怒哀樂を色に露はさゞるは賢なれども常人の甚だ難しとする處、就中喜と樂とは忍び易きも、怒と哀とは忍び難し、忿怒は情の激發にして之を抑制するは修養の力に待たざるべからず、ビサゴラス曰く「憤怒は痴事に始まり後悔に終る」と、忿怒は一時克く人を制するも、激發昂騰の情冷めて靜まりたる後、心を平かにして省みる時は悔ゆる事多し。修養の力は忿怒の抑制力如何に據て試むべし。忿怒に代ふるに敬愛の德を以

てするものは君子人なり。老子の「怨みに報ゆるに德を以てせよ」と云へるも、耶蘇の「汝の敵を愛せよ」といふも、是れ忿怒を警むるものなり。

九五、貧賤も羞づる勿れ

貧と賤とは、皆是れ人の厭ふ處、然り何人も富と貴とは希ふ處なるべし、此希望ありて始て克く活動す、而かも富あれば貧あり、貴あれば賤あり、此兩面は人生に到底免るべからざるを奈何せんや。左れば貧賤なるものは羞づべきか、吾人は信ず、貧は羞づるに足らず、羞づべきは貧にして志なきなり。志あらば貧なりと雖も、其人格は富めるなり。賤は卑しむに足らず、卑しむべきは賤にして能なきなり。能あらば賤なりと雖も、其の人格は貴きなり。貧なりとて自侮する事なく、富者以上の高き志操を持せよ、賤なりとて自輕する事なく、貴者以上の高き能力を持せよ。

九六、老死も厭ふ勿れ

老と死とは、皆是れ人の厭ふ處、然り何人も若と生とは希ふ處なるべし此希望ありて始て克く活動す。而かも若あれば老あり、生あれば死あり此因果は人生に到底免るべからざるを奈何せん。左れば老と死とは嘆ずべきか。吾人は信ず、老は嘆ずるに足らず、嘆ずべきは是れ老て虚しく生くるなり。老ふるも猶且つ社會の爲に貢献するあらば若者と擇ぶ處な

し。死は悲しむに足らず。悲しむべきは是れ死して聞ゆるなきなり。死するも芳名を千歳に遺さば、是れ永く生くるなり。老ひたりとて自棄する事なく、死に至るまで人事を盡すべし、死するとて落膽する事なく、棺を蓋ふて後の定評を恃め。

九七、不朽に生きよ

俚諺に、人は死して名を遺し虎は死して皮を遺すと云へり。幸福ある生活は人の羨やむ處、是れ安逸を貪ぼらんと欲するに過ぎず、何ぞ永久に生くるを思はざる。乃木大將の詠に「武夫は金も寶も何かせん命にかへて名こそれしけれ」と此言吾人の至寶ならずや。曹丕か「生きては七尺

の形あり、死しては唯一棺の土、唯德を立て名を揚げて以て朽ちざるべし、其次は篇籍を著はすに如くなし」と云へるは德を以て名を後世に遺す能はずんば、篇籍著作に據て後世に生くべしといふの義なり。文章は不朽の盛事、人せめて朽ちざるに生くるの手段は篇籍に在るかな。

九八、行爲は雄辯

百聞は一見に如かずの語ある如く、耳より入るものゝ力よりも、目より入るものゝ力大なり。故に人を善導せんと欲するものは、百の言語を盡すよりも、一の行爲を以て示すに如かざるなり。シェクスピヤ曰く「行爲は雄辯なり、而して無識の人の眼に觸る」と、雄辯は人を動かすの力

あり、行爲は雄辯家の辯舌の如くに鋭利なる力を有す。天下有識の人少く無識の人多し、世を濟はんと欲する者、多數の無識者を善導せざるべからず。無識者の耳は言論を解する能はざるも、其眼は克く行爲の善惡を解す。無識者に對する感化力は、雄辯の有識者に對するが如し。

九九、氣品節義

氣品と節義とは人間の眞價なり。榮爵も富貴も勳記も氣品節義より見れば何等の光輝あるものにあらず、何等の價値あるものにあらず、氣品節義とは何ぞや、德川光圀の訓戒以て盡すべし。曰く「節義とは口に僞を言はず、身に私を構へず、心直にして外に飾りなく、作法亂れず、禮儀正しく上に諂はず下を慢らず、己が約諾を違へず、患難を見捨てず、甲斐々々しく賴若しく、假初にも下ざまの賤き物語惡口など言葉の端にも出さず、恥を知り、首を刎ねらるとも己がすまじき事はせず死すべき場をば一足も引かず、常に義理を重んじて其心鐵石の如く、又温和に慈愛にして物のあはれを知り、人に情けあるをいふ」と。

一〇〇、農家の婦女

霖雨濛々たる朝た、烈陽赫々たる日中、寒風凛々たる夕べ、天候と戰ひ風雨に抗し、而して人生の本然を果しつゝあるものは、農村の勤勞にあらずや、近時婦女子の思想滔々として華美に赴くの時、思ひを農村婦女

子の勤勞に移さば吾々は教訓を得る事の少からざるを覺へん、工場に働く女子は、多く未婚時代に在れども、農家の婦女子は、相應勞働に堪ふべき体力を供ふる妙齡の頃より、老ひて幹軀の動かざるに至るまで、孜々吃々として勤め、幼は老を扶けて稼ぎ、老は壯を幇けて働く、是を此れ生涯の自然條件と爲して怨みなく、世の婦女子が粉黛美裝を競ふも羨ます、終生を國產の收穫に托し營々として家業に倦ざるを視ては、彼の紅粉凝裳鏡面に對して、其形を修むるを是れ事とし、終日爲す事もなく徒手遊食するの女子は當さに慙死すべき乎。

一〇一、婦人と產業

男子は多く生產者にして婦女子は多く消費者の地位に在り國に生產者尠くして、消費者多ければ即ち貧しからん、婦女子をして消費者の地位より一轉して生產者たらしめば、其國の產業は著しき發達を見ん、然るに婦女子は虛榮に驅られ易き賦性を有す、徒處遊食するを以て貴婦人の榮を得たるものと爲し、之に倣ふて產業に就くを賤しみ、其嫁くべき處を撰ぶにも亦、產業に勤勞するものよりは、夫の利祿に依て遊食し得らるゝを求めんと欲するもの比々皆然り、世に自覺せりと稱する女子も人權上若くは趣味上の自覺に止り、未だ經濟上の自覺に及ばず、國を思ふて自から消費者の地位より轉じて、進んで生產者の班に入らんと欲する者なきは、文明社會の一恨事にあらずや、國の貧富は婦人就產者の夥寡

に依て之を卜すべしと云へるの言、亦味ふべきなり。

一〇二、女禍の慘

「雲鬢花顏金步搖、芙蓉帳暖度春宵、春宵苦短日高起、從此君王不早朝」とは、白樂天が玄宗帝の楊妃を喪ひし心事を詠じたる傑作長恨歌の一節にあらずや、玄宗由來聰明克く賢に任じ能を用ひ、一世の明君を以て目せらる、其元獻皇后を失ひて哀悼措く能はず、武叔妃を得て僅かに自から慰め、後楊玉環を得るに及び終に其愛に溺れて國政を廢し、安祿山をして反を唱へしむるに至る、一妖婦の爲め國を誤り民を傷ふもの古今東西其の軌を一にす、所謂傾城傾國の名ある所以なる哉、女禍の慘亦恐るべからずや、餘義なく妃を縊殺して帝の長恨絶へず、白樂をして「在天願作比翼、在地願爲連理枝、天長地久有時盡、此恨綿々無絶期」と歌はしむるに至る、婉戀萬態三千宮女の寵を一身に集め榮華に飽きたるも一時の夢、絶世の佳人亦浮薄の運命を脫せず。

一〇三、女操の美

形狀の美は何人も其愛玩に一致す、而も是愛玩にして愛情にあらず。故に妻を迎ふるに單に容姿の美を擇ぶは、妻を以て愛玩物とするに同じ、其色褪せるに至らば愛忽ち衰ふるも其が爲のみ。人は形狀の美色以外に情操の美を認めざるべからず、情操は即ち女操なり、女操の美こそ眞に

情愛の宿る處にあらず、西哲曰く「貞操ある妻君は良人をして純潔秀美なる愉快を感せしむ、其容貌は美麗なる花園の如く、其精神は有益なる書籍の如し」と。形狀の如何に拘はらず、心の優しき處其容貌をも美しく看らるべく、其精神は良人をして書籍を讀む以上の慰藉と享樂と利益とを得せしむべきなり。

一〇四、秘密と女

秘密は固より正道にあらず、一の惡德たるを脱せず、而かも人間理想境に達せざるの間人界の辭書より秘密の文字を除去する事能はざるべし。秘密にして顯はれずんば則ち秘密無きに終る。然れども隱れたるより顯はるゝはなしの語ある如く、火は秘すべきも烟の之を顯はすを如何せんや。殊に女性の口は秘密を保つ能はざる事、古今東西其揆を一にす、パルワーは「油と水の相容れざる如く女と秘密は相容れざるの性を有す」と云へり。女に戒むべきは其口なり、饒舌は禍を逐ふて禍を招く慎まざるべけんや。

一〇五、家庭の和樂

家庭の和氣は人唯一の慰藉なり。外に在て寒暑と闘ひ、嘲罵を潜り毀譽を浴びあらゆる人生の嫌厭と戰つて、心身共に疲憊したる後一度家庭に歸らば、家人の愉色婉言父母妻子兄弟の間を調節流露して我心を欣歡す

之に依て苦惱を忘れ忿怒を忘れ悲歎を忘れ、以て新しき活氣を養ふに至る。家庭の和風は眞に回元の皷舞にして回春の妙藥なり。人若し家庭の和樂なくば慰藉に缺げ、疲憊したる心身をして再び勇氣を皷して翌日の活動舞臺に立つに堪へざらしむべし。

一〇六、居は心を移す

卑低に居る者高きに登て始て其危きを知る、恒に高處に居る者は自から其地位を知らざるなり。晦暗に處して而して後明に向へば始て太だ露はるを知る、恒に明に居る者は自から其露呈を知らざるなり。節寂を守り而して後動を好むの勞あるを覺ゆ、恒に動く者は自から勞の過ぐるを知

らず。默を養ふて而して後言多き事の躁なるを知る、恒に言多き者は自から其躁輕なるを覺らざるなり。居は心を移す、其居る處に依て心的同化を受くる事然り。

一〇七、美の力

美の力は宏大なり、美の前には何人も敬愛を拂ふ、自然美、色彩美、等を通じて最も力あるものは人の美なり、マコーレーは「此世に於て最も美しきものは美しき婦人なり」と云へり。如何なるものゝ美よりも、最も人を幻惑するものは美人なり。之に對する耽愛を戒むると否とは男子の自制力によるのみ。美中の美たる點に於て美人に過ぐる者なきは何人

も異議なけん。英雄の一面必ず美人ありて慰藉と勇氣を增す。天下の爭奪美人の力に據るもの亦多し。孔子が「吾未だ德を好むこと色を好むが如き者を見ず」と嘆息せしを見ても、美人の力の如何に好愛を惹くものたるかを窺知すべし。

一〇八、盜漢も桝を有す

人誰か正を喜ばざらん、人誰か曲を惡まざらん、互に其正しきを矯むる爲に度量衡器行はる。朝鮮の諺言に「泥棒の家にも桝あり」の語あり。洵に是れ俳味を帶びたる微妙の發見にあらずや。盜漢と雖も物を量るに桝を用ふるは正しきを愛するなり、此諺言を以て曲庇を敢てして憚からざる人を戒むるに足る。渠等自から私かに省みて怩怩たるの時は即ち是れ良心發動の時なり。人は曲を思ふの時、須らく度量衡器の正しきを指すに鑑むべし。

一〇九、足るを知れ

「千疊敷に寢るも身は一疊に過ぎず」といふ諺あり、「又千萬石も食一杯に止る」といふ諺あり。卑近の言なるも克く以て戒めと爲すに足る。徒らに貪欲望を逞ましふし、其多きを貪ぼるも、腹一杯より外食ふ能はざるべく、一疊敷の外に身を擴ぐる事能はざるべし。是れ足る事を知れといふの義なり。併しながら消極にして、積極の勇なくんば、個人富

まず個人富まざれば國富まず。積極的進取の勇は必要なり。單に自己の能力を解せずして、貪婪强慾以て自から榮華に飽かんと欲するの無謀を戒むるのみ。

一一〇、鍋の贊

白河樂翁公が鍋の贊に曰く「此尻日に三度び燒て天下平かなり、燒かざる時は民苦む、おふけなくも、高き屋の御製も此尻より出づ、みだりに燒く時は家滅び、燒かざればまじはりなし、吉凶貧富この尻に在り」と而して一狂句を添へ「よきに煮よあしきに煮るな鍋て世の人の心は自在鍵なり」と、諧謔眞に穿てるものあり。鍋尻の燒き方如何は實に之を大にしては天下の治亂に關す、之を小にしては一家の經濟に關す。凡そ物は其用を誤らず、其適しきを過ぎず、用ふべきに用ひ、用ふべからざるに廢するを要とす。味ふべきかな鍋の贊。

一一一、恩裡害を生ず

恩惠を施すは善好なり、然るに恩却て害を我に酬ふる事あり。即ち恩に狎るゝもの恩の寡きを念ふ、其寡きを念ふの時則ち不平を生じ、遂に却て恩人に讐する者あり、始より恩を施さず之に接近せざらんには、寧ろ此害なきを得べし。光秀の信長に反きたるも寡恩の不平に出つ、信長始より光秀を近づけず、些の恩惠をも施さゞりしならば、彼の害なかりし

なり。小人は恩に狎れ易くして、終に其多からんことを求む、寡恩に感激せし初心に省みれば、自から慾求の妄なるを知らん。而かも自省なきは小人の常、恩を施す者自から心するに如かず。

一一二、敗後功を成す

事を企つる者成敗は其常なり、事悉く成らば誰か悲哀の子たる者ぞ、其成るは成るの理あり、其敗るゝは敗るゝの理あり、成敗定て後靜かに其經路を省る時は、大に自から覺る處あるべし。然れども敗るゝは則ち窮まれるなり、窮まりたる後は必ず通路生ず。敗後豈に成功の時なきを必せんや。事志と違ひ物心に戻るの時、遂に之に屈して自から抛てば、復た回すべからず。抛擲は死と同じく人間最後の措置なり。破るゝも手を放つ事なかれ、志と違ふも落膽すること勿れ、窮りたる後は必ず通路を發見するを知て、敗後の成功を待つべし。

一一三、粗衣粗食

粗衣粗食に甘んずる者は、其心氷清玉潔の者多く、衰衣美食の者は、其心泥濁土穢の者多し。前者は望むも得べからざるが爲に廉潔自から居り後者は欲するがまゝなるを以て、貪愛禁ずる能はず。前者は他人の阿吏を求めんと欲せざれども、後者は婢女の膝行と奴僕の諂願とを迎へて得々たり。前者或は負惜みの爲態なるも、其志は寧ろ淡泊なり。後者は驕

傲にして、其志や多欲なり。若し夫れ富貴にして粗衣粗食に甘んずる者あらば、是れ至高の君子人たり。禮節は謙讓の中に宿り、驕傲の中に止まらず、左れは前者は禮節の士たるも、後者は不禮の徒たる者なり。

一一四、悔は善

菜根譚に曰く「世を蓋ふの功勞も一個の衿の字に當り得ず、天に瀰るの罪過も一個の悔の字に當り得ず」と殊勳功績を衿るものは、勳功なきに同じ、如何なる罪過も悔ふるに及んで消滅す。懺悔は人の最善美なり。人過ちありて之を改め、罪ありて之を悔ふれば、是れ本然の美心に還るものなり。美心に宿りたる者を逐ふて之を咎むるは、美の境を認めざるなり、悔の一字を辭書より取り去りたるものなり。悔の字存在する以上其字の力を承認せざるべからず、悔は善なり豈に之を追窮して罪を問ふべけんや。

一一五、悔悟

悔悟は感情の後に來る理性の働きなり、過ちの後に來る改悛なり。迷夢の後に來る覺醒なり。而して人幸運に居るの間は、非行あるも多くは之を悔悟せず、悲境に陷るに至て、始めて其前非を悔ふる者なり。ルーソー曰く「悔悟は幸福の日に眠り、艱難の日に覺む」と、然り順境に飽くもの悔悟を知らず艱難に逢ふて始て其前程を辿る時多くの悔悟は其胸に

迫るを覺ふ。運既に定つて悔晩きあものり、悔早くして危機を幸運に轉ずる者あり。其何れたるを問はず。人靜座すれば日常の事悔悟するもの頻々。

一一六、善美は他に分て

過ちを他に嫁して自から潔きを欲するも、完名美節は之を他に讓らずして、自から己を飾るも、俱に是れ俗惡の情なり、斯の如きは却て他の猜みを招き自己を危くする事あり、愼まざるべからず、善行美擧は之を他に分ちて獨占すべからず、他人の過誤汚醜は之を自から分ち荷ふて他の罪を減ずべし。是れ他人の妬みを避け他人の敬慕を招く所以なり。自己の德光を發燦せしめて得々たるは、眞の德行者にあらず、燦光を韜みて遜謙自から居る者眞の德行者なり。

一一七、權利と德行

世澆季と爲りて人情反復、昨の味方は今の敵、就去變幻覘ひ難し、世路何ぞ崎嶇の難行なきを得んや。此人情の巷を走せ此世路の難險を行かんと欲する者、用意なくして可ならんや。未だ行き去らざるの處は、須らく一歩を退て人に讓るべし。行き得て去りたる處と雖も務めて三分を讓り人に與ふべし。權利の尊重は可なれども謙遜の德なきは人情に缺く。權利は爭ひの主張に見地を置き、謙讓は避爭の德行に見地を措く。自己

の權利を主張するは爭ひの本と爲り、他人の權利を尊重するは避爭の德行と爲る。

一一八、即日敢行

事は一時を措くべからず、今日を迎へて明日ありと云ふ事勿れ、又徒らに往日の行爲を追縱して、之を喜び之を悲しみ、而して今日を忘る勿れ須らく其日の事は即日之を辨じ、以て善を積むべし。川村東村云べる事あり曰く「往日の縱を追ふ事莫れ、來日の杳かなるを迎ふる事莫れ、唯一日目下に勉めて善を爲すのみ、久ふして自然慣習し善是れ性とならん」と誠に欺かざるの言なり。一日一善は即日の敢行を貴ぶ、今日の惡を補ふに明日の善を以てせんと冀ふは非なり。

一一九、兩端

丈夫世に在り苟くも其存在を認められざるべからず、有るも益なく無きも害なきものは死灰のみ。害ある者は固より除くべしと雖も、害あつて始て益を認むべきが故に益の對象として害の存するも亦戒心の一助と爲るべし。故に無くてはならぬ人と爲るにあらずんば、有てはならぬ人と爲て、世を警むるに如かず。所謂沈香もたかず屁もひらざるの底は者は害益共になくして何等社會に貢獻する處なし。牛羊と爲て人の血肉と化せずんば、豺狼と爲て人の血肉を啖へ。是れ人を警むるの一助たればな

り。

一二〇、敬と憐

朋輩の間強者あり弱者あり、長あり幼あり、何ぞ敬と憐と無らんや。長は幼を憐れみ幼は長を敬ひ、強は弱に同情し、弱は強に隨へ、敬とは眞實篤行にして畏愛背かざるを云ひ、憐とは實義に慈愛深きを云ふ。敬憐の眞實が朋友の間に漂ふにあらずんば、長幼の序も保たれず、強は弱を壓し弱は強に怯するの不義となるべし。朋友の間を連鎖する信義は即ち是れなり。

一二一、立身の要

成功は能く艱難を凌ぐの手に收むべし、勉むる者は貧に捉ち、慎むものは禍ひに勝つ、汝能く業を勵まば業能く汝を護らん。他の富を羨まんよりは、我業を勵むに如かず。少くして遊ぶ者は老いて窮す。人を恃みて授けを求むる者は弱し、自己を助くる者は他にあらずして自己なり、賴むべきは人にあらず己れなり。自己を沒して他に依賴するは寄生蟲の自から生活し能はざるに同じ。思ふに立身の要は此の如きものか。

一二二、不思議なる酒

酒を釀すには一定の法あり、何等複雜混亂の事あらず、然るに此酒は頗る不定不律にして複雜混亂の事態を釀す。飲むべき酒には一點の塵なく一色の濁れなし、然れども之を飲む者濁溷汚穢を生じて、氣大に狂ふ。潔を以て不潔の因をなす、不思議なるは酒なる哉。酒飲むべきか飲まざるべからざるか。唯夫れ嚥下して之を汚化すると清化するとは人に在るのみ。飲で可なると可ならざるとは酒其ものにあらずして人に在り。

一二三、行の一字

學問は學び得べし、而かも學びたる者必しも行ふ者にあらず、萬卷の書を讀み萬世の古へに通たるも行はずんば何の益がある。博聞强識或は詩文に巧みなるも、行ふ能はずんば畢竟虛文虛說を學びたるに等し。學問は學問其者に價値あるにあらず、之を行ふに因りて始て價値あり有學の人無學人のに劣る者幾千萬なるを知らず。學ばんと欲する者當さに行の一字に到達せずんば是れ學に淫するなり、罪を先識聖賢に得るなり。

一二四、衣服

衣服は禮を失せざるに足る、必しも美しきを要せず、然れども資力ある者其美を欲するも敢て妨げず、要は唯美を誇らざるに在り。人格に價ひある者の美衣は珍寶を錦に包むものと見るを得べきも、人格なき者が美衣をまとふは瓦礫を包むに錦を以てするに同じ、或人曰く「美服は價値

なき人の肩に泣く」と、眞に然り、人格上の自負ある者は粗衣にして恥ぢず、人格上自から下劣なるを知る者、其外形を飾りて其品位を裝はんと欲す。賢者の眼を以て之を見れば潛かに笑ふに堪ゆるのみ。

一二五、　道を易きに求め

道を求めて難しとするは、其難きを求むるが爲あり、道を求めて遠しとするは其近きを求めざるが爲なり。道を道として行けば何の難き事か之れあらん、道を道として辿れば何の遠き事か之れあらん。道に隨はずして荊棘の裡に入り、明るみに行かずして暗きに走る、是れ迷ふ所以なり

ブローダス云へるあり「海に下る路を知らざる者は河に隨て往くべし」と、洵に是れ眞理の道破なり。河は必ず海に注ぐ、此理を知て道を求めば誰か海に達せざる者あらんや。

一二六、　小兒と醉客

小兒は天眞なり虛僞を知らず、外界の知育渠に虛僞を誨ふ、長じて巧みに譎詐を用ふ、醉客は其眞心を語る、醒むるに及んで巧言令色を以て處世の術となす、諺に曰ふ、上戸本性と、宜べなり人は眞面目の時交際の上に於て常に虛僞を用ひ其及ばざるを恐る。醉ふて語る事は虛飾なくして其本性を吐露す。或人の謂はゆる「小兒と醉客とは虛言を吐かず」とは即ち是れ。吾人は酒の狂を惡めども醉客の天眞小兒の如くなるを愛す

嗚呼小兒なる哉、醉客なる哉。

一二七、根苦く實甘し

樹根の苦がさは基礎を樹つる事の艱苦を意味し、其實の甘きは、艱苦を積みたる基礎の上には、生ひ立ち好き樹木を生じ、其實は甘くして食ふべきを意味す。人事業を起さんとして其根本を造くるは頗る苦心なり而して成立したる後利益を收むるは誠に是れ甘味の感あるにあらずや。「事業の根は苦けれども其實は甘し」の語あり、甘き實を得んと欲せば須らく苦がき根を造らざるべからず、苦根を造らずして始めより甘實を穫んと欲するも得べからず。事業家が其目的の爲に艱苦辛酸具さに嘗め盡す

は、即ち甘實を穫んが爲なり。

一二八、唯一の朋

何人にも最も恃むべき、最も親しき、最も敬愛なる、最も欺かざる、唯一の朋友あり、之を誰とかなす、曰く自己なり。自己は自己唯一の友なり。如何なる益友にも如何なる親友にも優る友は自己なり。自己は到底自己を欺くものにあらず。自己は決して自己を憎惡するものにあらず、自己より親きものなく、自己より恃み多きものなし、親子兄弟朋友に見放さるゝも、自己は自己に見放さるゝ事なし。畢竟するに人、有力なる自己といふ朋を有しながら他に依賴心あるは、自から自己を疎んずるも

のなり。人各自己唯一の朋は自己たるを自覺せざるべからず。

一二九、欲と義と

苟くも利欲に關する事は己れに便なるを樂しみて其指を染むる事なかれ一度染指せば深く萬仞に入て、益す樂みを覺へ遂に去る能はず、其醒むるに及んで非を悟るも既に晩し苟くも義理に關する事は、其難を憚かりて退く事なかれ、一度び退歩せば怯心頻りに動いて、千山萬岳の隔たりを生じ、遂に義の人たる事能はざるに至らん。利欲は長じて罪を釀し、義理は長じて功を爲す。而かも前者は樂しみ易く後者は難を感ず、易を退け難きを取るは勇の一字に在り。

一三〇、對抗の氣慨

人は何事にも對抗の氣慨あるを要す、之無きものは卑屈なり、彼富を以て我に臨めば、我は仁を以て彼に對抗すべし、彼爵を以て我に倨れば我は義を以て彼に對抗すべし。我自信の爲には何物にも屈すべからず、併しながら其自信は道の啓進にあらざるべからず。人は良心に生くる者なれば、道の外に自信あらざるなり。古人曰ふ「人定て天に勝つ」と、自信ありて驀進する處天災何かある、自信は對抗の勇氣を宿す、對抗は氣魂の烈强なるもの男子兒の取る處。

一三一、立身と處世

一身を立てんと志す者は、他より一歩を高く占むるを要す。然らざれば塵埃の裡に立ちて塵を拂ふと同じく遂に塵中の人たるを脱せず。泥水に足を濯ふが如く、遂に泥中の人たるを免れず。世に處して安樂ならんと欲せば、須らく一歩を退て他に讓らざるべからず、若し進んで取らんと欲せば、飛蛾の燭火に投じ、羝羊の藩籬に觸るゝと同じく、自から身を亡ぼすに至らん。立身は志の高きを要し、處世は謙退の德を要す。

一三二、感情と理性

人多く自から其功を語れども、自から其過ちを語る者尠し、他人の恩に浴したるは忘るれども、他人に對するの怨みは忘れざるなり。自から過ちを語て功を語らざるは仁人なり。恩を忘れずして怨みを忘るゝは大人なり。其仁人たり大人たらんと欲せば、勗めて自から感情を抑制し、理性を以て之に勝つを要す。感情を去り理性に生くるは夫れ修養の力なり世の所謂德性の涵養とは、感情を和らげて理性を發達せしむべき方法を講ずるにあるのみ。

一三三、報償と賣名

恩を施して之を誇るものは不仁なり、他を利せしめて自から報償を求めんと欲する者は小人なり。而かも今の世は恩を施して其名を知られんことを思ひ、他を利すれば當然報償を要求す。是れ恩を受くる者恩を感せ

ざるが故に施恩者は其名を賣て自から慰めんと欲するなり。利を受くる者進んで報謝を盡さゞるを以て、與利者は報償を要求す。是れ相互の間道義を失するの致す處にして、社會道德の進まざるが爲なり。報償と賣名とは社會の缺陷より來る自然の要求なり。

一三四、治は德に在り

古へより威望あるの君主にして、亂臣賊子のために困めらるゝもの、畢竟是れ薄德の致す處、今の宰相亦策を用ゐて德を布かず、胡ずれぞ天下の治を得んや、徒らに人爵を高くし、行ひを卑しくして、人の威服を求めんと欲す、豈に得べけんや、治者既に斯の如し、故に敎化の美亦擧らず、大舜は歷山の一農夫を以て天下の人心を統一したるにあらずや、孔子は喪家の一孤子を以て、一擧に三千の徒を心服し、敎へを萬世に垂れたるにあらずや、基督は猶太の一貧兒を以て歐洲の生靈を同化したるにあらずや、今の爲政者たるもの、今の敎育家たるもの省る處なきか、孟子の言を聞けよ、「反て之を己れに求む」と又聞けよ「家の本は身にあり」と仁に反り智に反り敬に反れよ、先づ身を修め家を齊へ而して國を治めよとは、是れ孟子の敎ふる處古への聖賢悉く我に可ならずや。

一三五、韻文の微妙

一絶の文字、情致濃かにして克く丈夫を擒にし、一度び朗吟すれば忽ち

潛龍をして舞はしむるもの、寔に是れ韻文の靈妙にあらずや、古へより詩歌文章の以て人を動すもの少からず、然れども彼の前秦の安南將軍竇滔の妻、蘇惠若蘭女史の織錦回文の如く、性靈の微妙を盡し、情致の深刻なるは古往今來未だ曾て見ざる處、九郎判官の遺嬖の情歌も有髯男兒を綿の如くしたると好一對か、靜は舞技を以て歌に配し、若蘭は織技を以て詩に配す、長文の詩を錦に織り成せる丹精に至ては靜の及ばざる處試に其一句を味へば『何期一去音信斷、遺二妾幄幃一春不レ暖、瓊瑤階下碧苔生、珊瑚帳裡紅塵滿』何ぞ此句の多恨なる、遠征せる夫が音信を斷つを憾み、獨り帳裡に遺されて春猶暖かならず、郎在らずして誰のためにか室内を清掃せんやと、じれたる處の情致亦可憐なる哉。

一三六、文辭艶麗の力

支那の婦人は柔順にして之に比すれば日本婦人は活潑なり、貞操の固き事日本に在ても龜鑑とすべき婦人の德行少からず、然れども多くは半ば勇壯の意味を含めり、所謂是れ大和魂の化現ならずや、支那婦人は唯柔唯順なるを以て婦德となし更らに氣慨なしと雖も、守操の一點に於ては亦以て讓らざるを見る、唯夫を勵ますが如き雄々しき言動少くして女々しき情慕の溢るを見る、蘇若蘭の錦字詩、貞は即ち貞、美は即ち美なりと雖も、夫の遠征を恨みて早く還らんことを帝に求むるに至ては、全然日本の女子と其性格の異なるを見る、『君今憶レ妾重如レ山、妾亦思レ君不

暫閑一、將下織二一本一献上三天子一、願放二兒天二及「早還二」此言遂に忠勇の良人をして懦夫に陷らしむ、女史の性格や感ずべからず、只一文を以て男子を動かしたる、文辭の艶麗の力能く心事の優しきを表明して遺すなきを感ず。

一三七、詩は眞理の聲

詩は自然美の聲なりとは人皆云ふ處、我は之を眞理の聲と云はん、美は邪なき慰樂の感想なり、邪なければ即ち是れ眞理なり、詩は此美其感想を心に織り筆に繡するものなれば、其の韻や宇宙眞理の聲ならん、左れば森羅萬象一として此眞理を有せざるものなきと同時に、一として詩ならざるはあらじ、詩は必しも風流韻事の優長思想にのみ宿るものにあらずして、深遠なる學問の上にも宏潤なる經綸の上にも、亦其の宿るを知らざるべからず、徒らに詩を以て酒間應酬の道具と爲すが如きは、其の本義を誤るものにあらずや、朱子は曰く「諷詠以て之を唱し、涵濡以て之を體し、之を情性隱微の間に察し、之を言行樞機の間に察し身を修めて家に及ぼし、天下の道を平均す、亦他に求むるを待たず」と美的感想をして更らに一段の向上を遂げしめば、天下豈に形と韻の美のみならんや。

入れば則孝、出れば則弟、謹で而して信、汎く衆を愛して仁に親づく、行ふて餘力あれば則以て文を學ぶ、とは青年に對する古聖の訓誨にあらずや、孝弟信義仁禮の人道を修行するは最高動物として下等動物に異なる所以なり、今の青年切りに文藝を修して德行を怠る、文藝に秀つゝも不孝不弟不信不仁にして、其文果して清光ありや、德行は本なり文は末なり、其本を齊へずして末を學ぶ、文其聖を失ひ、其質を滅す、聖明なきの文藝は輕薄にして質實を有せざるの文藝は力なし、豈只文藝のみならんや、百の學術秀づるも德性修行の缺如せるものは卑さなり、所謂文章に氣品あるもの是れ、文彩の美さよりも德性の流露を視るを云ふのみ。

一三九、有聲の畫無聲の詩

詩は有聲の畫なり、畫は無聲の詩なり、俱に幽明の天籟を發揮すべく、性靈の微妙を流露すべし、詩韻を綴る能はざるも人は自然に詩的趣味を有す、性靈あるもの誰か麗秀明媚の風光を見て嫌穢の念を起さんや、誰か花顏雪肌の美人を見て醜厭の感を生ぜんや、絕景を見ては之を嘆賞し佳人を見ては恍惚たるもの、皆是れ詩的感想にあらざるなし、之を性靈の微妙とは云ふなり、其感想の聲と爲り文字と爲り畫と爲て發揮するものは、則ち天籟にあらずや、詩に於ても畫に於ても、情を描き、物を寫し、感を布き、以て聽くもの見るものをして、自から其境に居るの思ひ

あらしめ、神を感想の域に逍遙せしむるにあらずんば、未だ以て其靈妙を語るべからず、唯夫れ人の固有する詩的の感想を、自在に遺憾なく描き出すもの、即ち之を詩人と云ひ畫家とは稱するなり。

一四〇、詩と文章

白雲彩霞は穰々たる黄禾と相映じて滿野の秋を示す、荒涼寥闃は却て詩趣あり想を奔せ筆を驅るに適し、西人は詩を以て無聲の音樂なりと云ふ自由に出でたる言語なりといふ、然り其韻聲の點に於て音樂たるを失はず、喜怒哀樂を寫して憚からざるは、自由より出でたる言語に外ならず詩は優美の文字にして、文章と自づから其趣を異にす、文章に尊ぶ處は氣象峰巒にして、而かも彩色絢爛人をして興に乘じて讀ましめ、讀めば即ち覇氣あるを覺へしむるに在り、氣は秋の澄みたるが如く、而かも峻峭蕭條たるべくして、彩色は須らく春の濃やかなるが如くなるべし、魏文帝曰はずや、文章は經國の大業不朽の盛事なり、年壽は時ありて盡き榮樂は其身に止る、二者は必至の當期なり、未だ文章の無究なるに如かずと、然り古より文章の力が經綸の大業を果したる事多し、今の世は最も然り、詩は悠遊の閑にして文章は劇務の繁なり。

一四一、美人の詩的

自然の美は修めざるにあり、四季の山川克く眼を喜ばしむるもの、是れ

天地の靈妙にあらずや、人情美を愛するは天地間の自然なり、古より詩人の美を歌ふもの、多くは美人に藉り來て其情を描く、殊に荒貌赤貧の者も猶且つ美人に遭ふて心醉するの弱味あるを見ずや、東坡が麗人行に杜子美の失意を歌ふを見よ「杜陵飢客眼長寒、蹇驢破帽隨二金鞍一、隔レ花臨水時一見、只許腰肢背後看、心醉歸來茅屋裏、方信人間有二西子一」美人を瞥見して其面を見ざりしを憾み、恍惚として醉へるが如きも、粗笨の壯士は遂にまけ惜みして「君不レ見孟光擧レ案與レ眉齊、何曾背レ面傷二春啼一」と、醜貌の賢婦孟光の婦道を擧げて揚々たる美人に誡む、意を失すれば多く此くなるものなり、然れども自然の美想に憧がれて墮落するものに比すれば猶健氣なり。

一四二、人生は劇壇の俳優

天の人を生ずる元と尊卑なし、只人間界の福祉を進め秩序を保たしむべき爲に、仮裝の演劇士たらしむるに過ぎざるのみ、人君と人臣、宰相と僕婢是れ人間が天地の化育を助成すべき爲に設けられたる方略に過ぎず畢竟是れ道と理との爲に各其の業を分ち職を異にして働くに過ぎざるなり、臣として君に忠誠なるは地の道を助くるなり、君として臣を愛くしむは天の理を助くるなり、宰相と僕婢亦是れ各其分を竭して天地の道理を成す一の演習たるに屬す、看來れば恰かも劇場に登現せる俳優の役割に過ぎず、天地の化育を贊くるには人間界の秩序を保つを要す、人君人

臣宰相僕婢の制豈に先天的の貴賤ならんや、劇場登場の役廻りと見れば則ち可なり。

一四三、藝術と趣味

藝術は瀟洒たる人生に濃淡の色彩を添ふべき一の美的技能なり、無趣味の人生に趣味を送る美術なり、故に常に向上して已まざる性質を有す、人は如何に技藝に堪能なるも決して藝術の極點に達したりと云ふを得ず今日の完成豈に明日の不完全たるを知らざらんや、藝術の妙は物質的人爲が天地の自然美に到着すべき哲學の研究に在り、先人の模倣のみを以て滿足すべからず、哲學は何處まで行くも眞理にあらずして眞理を發見すべき學問なると同じく藝術は眞理の實体に近づくべき技藝の道程なり、常に向上發達するも其終極に達したりとは云ふべからず、若し藝術にして終極に達せば是れ最早藝術にあらずして自然に還れるなり、趣味は自然に近きて未だ自然に還らざる間に在り。

一四四、青年の負債

「親の恩は子に返せ」といふの諺あり、親恩は深遠にして言語の盡さゞる處、一生の全力を傾倒するも竭したりと云ふべからず、到底親一代に於て之を竭し得ざるが故に、我子を教養すべきを以て、親恩の報謝と心得ふべきを云ふなり、吾等は親に對する恩德の負債を有す、之を子孫に

拂はざるべからず、青年は鴻大なる凡ての恩德に對して負債を有するものなり、親恩の負債のみにあらず、時代の負債を有す、今日までの文明に浴して自己の充實を得たりとせば、之より新文明の氣運を開きて、後世に新しき裨益を遺さゞるべからず現在の事々物々は皆先輩の形見なりとすれば之を受けたる青年は後輩に對して、更らに此形見に添贈するに新しき形見を以てせざるべからず、新しき形見を贈るの義務は即ち是れ青年の負債にあらずや。

一四五、春光融々

雪骨の花既に落ちて武陵の花將に綻びんとす黄鶯樹を轉じて清音更らに喨々たり、新柳輕風に媚び、百草嫩芽を萌ず、昨は荒凉人稀なりし渺茫の郊野、今は靉靆として、和風温かに人の散策する者多し、知る是れ春光の已に融々たるものあるを、四眸未だ千紫萬紅の嬌艶を見ざるも、山巒將に秀麗の翠を爲さんとす、菜圃未だ彩氈を布かざるも、麥瀧既に雲雀を宿すに適す、烟霞淡蕩たり、水波は明媚なり、窈窕美人の桃李も、之より濃艶の裝を凝らして我に媚ぶべく、妍娟麗人の櫻杏も、之より粉黛を施して我が歡を迎ふべく清馨袗袖に泌するの香風は、芬々として之より我を襲はん、琴瑟の如く清笛の如き鳥音も、綿蠻として我耳を喜ばせん、一年の陽氣は千態萬容、天籟風韵と爲つて將に一時に到らんとす久しく蟄息鬱積したりし元氣は、爰に轄如として啓け、森羅悉く笑まざ

るはなし。

一四六、夏

誰か三伏の盛夏を怯れて、敢て暑を避けんとはする、天は時に異態を生じ變化を與へ、吾等の奮闘を促し耐力を試む、之を怯るゝは懦弱の自白なり、之を避くるは天の命を奉せざるなり、蒸熱酷暑は以て豪膽を練るべく英氣を養ふべし炎帝熱を放ちて四海爲に沸き烈陽灼々として堤柳庭緑盡く死するの日猛然起て祝融司令の軍と戰ひ、爍炎に抗し其日の業務を終へて凱旋したるの後水陰緑下に淋漓たる流汗を洗ひ、徐ろに凉味を納るゝの時、如何に雄志伸びて壯快を覺ゆる事よ、暑を怯れて避け、炎

を嫌ふて遁がるは、宇宙の自然と戰ふ能はざる者なり、夏は靜止の時にあらず、健闘の時期なり、殊に氣膽を練り雄志を展ぶべきの時なり、暑休の語は、勇壯健兒の當さに唾棄すべきものにして、又當さに社會の辭典より除去すべき文字なり。

一四七、瀑

夏時瀑布を訪ふの人多し、唯其奇秀を見水陰に憧がれて快と爲すは、凉を納るゝの韻事に屬す、吾等は宜しく瀑布に學ぶ處なかるべからず、奔馬の如き急湍が百雷の吼るが如き怒號を發して直下するや、危石屹立怗巖横遮、之を妨げんとすれば瀑水之を擊て激騰し、餘勢駭玉と爲り驚珠と

爲て迸り、雪花灑々の壯觀は、瀑水が前途に何物の障碍あるも怯れず其向ふ處に驀進して激破するの勇猛と、頑强剛邁の巖石が恐るべき激湍に抗して泰然不動、悉く瀑流の襲擊を碎く、其沈痛なる態度とを表現して、吾等の膽をして寒からしむるにあらずや、吾等は希望に向て進む事瀑布の如く、堅忍不拔なる事巉岩の如くなるべし、ジョンソンは曰く、功名心は瀑布の如し何物をも顧慮せずと。

一四八、川

嵩齶浸出の水滴、涓々たるもの集注して流れ、淙々海洋に注ぐもの、是れ川にあらずや、川流は行きて復た歸らざる事、今年今月今日の再び來らざるに同じ、去來元と是れ宇宙の原則、吾等は暑夏の夕べ柳陰に彳みて川流を臨む事多し、翠綠、風清く清冽、水涼しさを覺へながら、柳楊吾に呟くが如く、神秘的の感想を浮べん、曰く、終生崕頭に彳めども水は遂に我が爲に留まらず、何ぞ夫れ無情なると、此感の俗謠と爲りたるもの「何をくよ〳〵川端柳水の流れを見て暮らす」何ぞ夫れ表述の妙なる悶々人生を果かなみ茫然として光陰を徒過す然れども來るものは去るの原則を奈何ともす可らず、今日を空ふして又明日ありと云ふ勿れ學ぶに如かず働くに如かざるなり人生老ひ易く光陰回すべからざるを諷するは是川の敎訓にあらずや。

一四九、海

黒潮凄く妖幻の波面を現すは冬の海にあらずや、荒寥蕭殺閲然として帆影稀れなるは秋の海にあらずや、漾々として波静かに白帆砂鷗と疑はるゝは春の海にあらずや、白潮烈陽と相映じて光り、豪濤雄偉の觀を呈するは夏の海にあらずや、夏の海は壯豪なり、男性的なり、試みに水瀕の巨巖に踞して、眸を洋々たる海上に放てば、重き潮風膚に入て筋肉を練るが如く、奔馬の列を爲して襲來せるが如き濤勢は、澎湃として巖礁を嚙み、激淘迸ばしりて涙花濱粉たるもの、吾等をして云ひ知れぬ剛健雄猛の感を浮ばしむ、若し夫れ身を躍らして波間に投せば、怒濤吾を襲ふて、游浴の手練を奪はんとす、之に抗して奮鬪拔手を切り、逆卷く狂瀾に白沫を飛ばす雄絶壯絶に至ては、其快其爽名狀すべからざるものあり海は心膽幹軀共に修練の一物なり。

一五〇、盆栽

盆栽は高雅なる趣味を有す、趣味の中に人を同化せしむるの神秘的力を有す、盆栽は大景の縮寫、自然界の模型、盆上の老樹翳鬱として深山の大木の如く、亭々として天を摩する巨幹の如く吾等は之を眺めて趣味に活くれば、室裡恰かも幽邃仙寰の如く覺へ、自から樹下の人となり暑下綠陰息ふの感あり、白水盆上の一石亦能く水陰の涼を座上に送る、誠に